再勢參宮名所圖會

四

ル 4
3526
4

門ル4
3526
巻 4

伊勢參宮名所圖會卷之四

宮川 目録

堤 古
清野井庭社
山田
離宮院舊跡
豊川
北御門社
子良館
御酒殿
爰國山爰社
御牧小牧
清盛堤
鸚鵡石
大間國生神社
中嶋
厭離山浄土寺
月讀宮
御贄棚
國見社
忌火屋殿
御調倉
慶會國見社
土貢嶋
大間廣
久留山威勝寺
正法寺
高川原社
北御門橋
孫宜宿跡
本柴垣
御番倉
御厩
御川祭
爰波里
中川原
草薙社
下條中長秀
月縁三郎乳塚墓
三寶寺
舘町
外宮
富屋
丸林
北鳥居
廳舎
上御井社
清盛埴

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

一鳥居　神庫　苗の社　二鳥居
直會院　玉串折回り拂　別宮遥拜所　三石　御池
手水場　中堤　仔壯諸　仔壯冊　二宮拜所　御母神拜所　僧尼拜所
五百枝松　三鳥居　石壺
齋王候殿、　玉串御門　番垣御門　殿に御門　參三御門　神嘗祭御幣殿
度會宮正殿　相殿　三座　殿垣御門　東宮殿　西宮殿　幣帛殿　裏御門
御饌殿　比十束社　高宮　下部坂　袖搭石　金石
高宮岩座怪異　内宮遥拜所　玄　宮　月炊殿　地濃宮
山神社　下御井社　風宮　炊殿　宮　月讀宮遥拜所　月御炊殿
ゑ枝松　高倉山　岩戸　高天原　山田原　高神社
豐宮磯部　御田植の神ゑ　月文庫　屋上橋　度會大國玉比賣神社
伊賀利神社　井谷池　掘森　豐宮崎
神樂　彌河内　御田　安谷山

山末　麻留山　田上水社　宮淵氏社　世義寺　并
瀧浪山　白子園　岡本里　繼橋　小田橋
河邊里　妙見町　隱り岳　岡崎宮　尾部社
隱山　隱池　尾上山　常明寺　神賞落社　阿加井　敕汲碑　倭姫岩窟　眼地蔵　石獅子
光明寺　佐城入石道忠墓　小畠顯家碑　後白河院碑　建の多
經ヶ峯　間の山　古市　青雲院
貝吹山　中地蔵　葛籠石　大五輪
月讀伊弉諾両宮高地　菩提山大神宮寺　受泥羅石　王孫池
月讀森　仔壯諸　仔壯冊　宮社　興玉森　樣ヶ淵　皇女森
牛谷○浦田　中之切　慶光院　仔壯上人　岡田　那自賣神　楠部村　大土御祖社　國津御祖社
西行谷神照寺　鐵鉢谷　芙津寺　法樂舍　不動堂　津長社　大水神
鍬ヶ岳、　蓮臺寺　長明寺　林崎文庫
橋姫社　宇治橋　五十鈴川　御業潔門　鏡石

宮川東岸 一

豊宮川

風雅集

君が代の
ながらへと
宮川乃
岸の
枝しの
色も
かゝるべし

後京極

宮川（山田の入口より一名度會川 豊宮川 秡宮川 禁川と云 源は和泉国 流れは摩耶大橋 か宮小御門より飛鳥井 墓原辺より渕也其外谷々より落て二見大湊に至る 異伝の名）

小鷄鳴 西に宮川東風うけばうしの川あり

源は紀州の境より出て伊勢国に流れ入る 満水の時は内宮の神宮より勅使来向の時の例とぞ むかしは敬宮群幼勅使 御迂宮の庭より毎朝汲くる是上古敬宮勅使来向の時の例とぞ 昔は内宮の神宮より勅使 此川に流れ入る 毎年六月晦日祓宜の大祓も宮川に流れ入るなり

彩花 鍵をあらてなく宮川のゆうづゝ永延まてもかけ参れまん 定家

彩捨題 御祓とて紙を宮川の波浪の数より多紙祈いの紙の郡 朝勝

○清盛堤 宮川の堤なり元亨釈書に 此附の堤を今部とぬて宮川堤と云 元正天皇霊亀清和貞観の比度〻大風洪水せゝり記録に見へたり崇徳院大治三年勅して大宮三座及大河内神社志登美神社を河水の守護と祀らせ給ふ 仍平清盛命を蒙て此堤を築つ 又弘治三年秋来度〻洪水 元文六年辛酉七月廿三日洪水数百丈

○御川祭 毎年六月三日是と 鎮座の神〻多〻 法眼能国

年魚をとりて神饌に蓄ふとあり今も其末の御守氏の人給年を以て年魚取の式あり 其記云

「ことの神の孫 御八百の神を御しまして おまのこあへまする 神がきゆていまく 中略 たぐるまのちひろの縄うちえ つりあまのみちひろのをひ立のをでさいくえ引ようせあげて うけすけのことをゝ又あまのさかひまする 右古事記

坂士備采清記に 久〻宮川 毎年紙をつくり小俣田しらふ里の小ちる系紙まけて紙川に流るゝ 此川に流れ入る 紙を流し〻く離宮院の前に為めまよう系流し 又ふとこそ 紙掃まる天忍海人命の末〻〻てそのゝえ月のをしめのころ年魚紙とて伯へ紙例と下器 ○按るに往古の頃宮の大佛より南へ入て御の流しをまさり湯田殿を歴く離宮院の前へ出て流れもむかしに遠へり

▲藤波里 宮川やまゝ紙水のまくみを君にけさ紙浪の里

或記云 是も宮川ちかき紙地村の小又紙地の渉るとこの小森あり 其表の西の方宮川の間に内宮洞宮 藤波の里 法眼能国

内宮洞宮 彩花の歌合

幾多代を松ちぶりて藤波の里の花も春を経ぬらん 荒木田 長奥

▲御牧小野 彩花の歌合 春源 さゝまき紀の小野渉葉せて松系ゝてう紀藤浪 荒木田 長吉

と源で〻も藤波の紙に流れ〻ての接ぎ合てさう列者 檜大納言藤原為世卿の列の里の

あゝ〻荒涼之と云 右蜻蛉日記

或記曰 此名所と藤浪名の若〻 宮川の上に流る紙の川むひ

宮川の上に流る紙の川むひ 宮川の上の流〻 場より三里 流れ宮川口と云て人家もあり 山下西に大接谷野尻御瀬川より流れ来り東に鷄が鳴川の瀬うの

▲鷄鳴石 宮川の上の流〻 荷葉の里の花ぶひ〻 荷葉の里の花ぶひ〻 宮川上の流〻 場より三里 流れ宮川口と云て人家

中川原

諸国の糸治人を御師より人を出し変り逃人其御師の名溝の名組頭の

性名紙書し多此所の名を指牌を出せ〜ゆ作葬のごとく

落合之此より弱野へ三里弱路石まで五とべて八里とつゞく山道雖不に
して五丈の一日も暫も及ぶ絶〳〵紆て往来とれば其労已あり
急流あれば左よく絶糸つゝんで已別して弱が野より上も
巌聳然中中村の南絶見坂とて不和安双の勝景うして松陰に岑〳〵と
いと其南に性柄阿蘇うゝ村邑数多あり中〳〵魚鹽之益疾不絶と中〳〵魚鹽之益多しとて四
市中へ魚荷の出るもの百
数あれども畧之石山の事
もゝべき不可
の者より市に拙ゝく言ふ
義卿の詩ふようて詩況名
屏風之図せしめ其況を玄付
○漢名を鑑石〳〵
進法磯部村より日石あり
俗ようく〳〵
南路のつゞさなり
いを乗こし洗こるなり
長橋のす説く多〳〵

○性柄

○蒼山ようく橋流〳〵の神ゝ
紀る七月廿日之風日祈の神ゝ
橋の渡て流る

中川原 宮川の舞てあり人数引まう此東小ゆる白村の内之和名抄ゝ名る田と
書写の渡りと此町の西宮川の上之田丸の渡〳〵あり是を中渡ゝ

土貢考 東涯隨筆

宿為之石山の
ゝ

寂阿

村の渡〳〵の後附の渡〳〵を紙て多る村之ゝ此石の往還之ゝ

○中川原中路前い宮川の川中之中ゝ

堤之古 中川原の 世古と い他不て小路裏所之ゝ

附言 ○非郡之て撰石中後を世古ゝ之ゝ

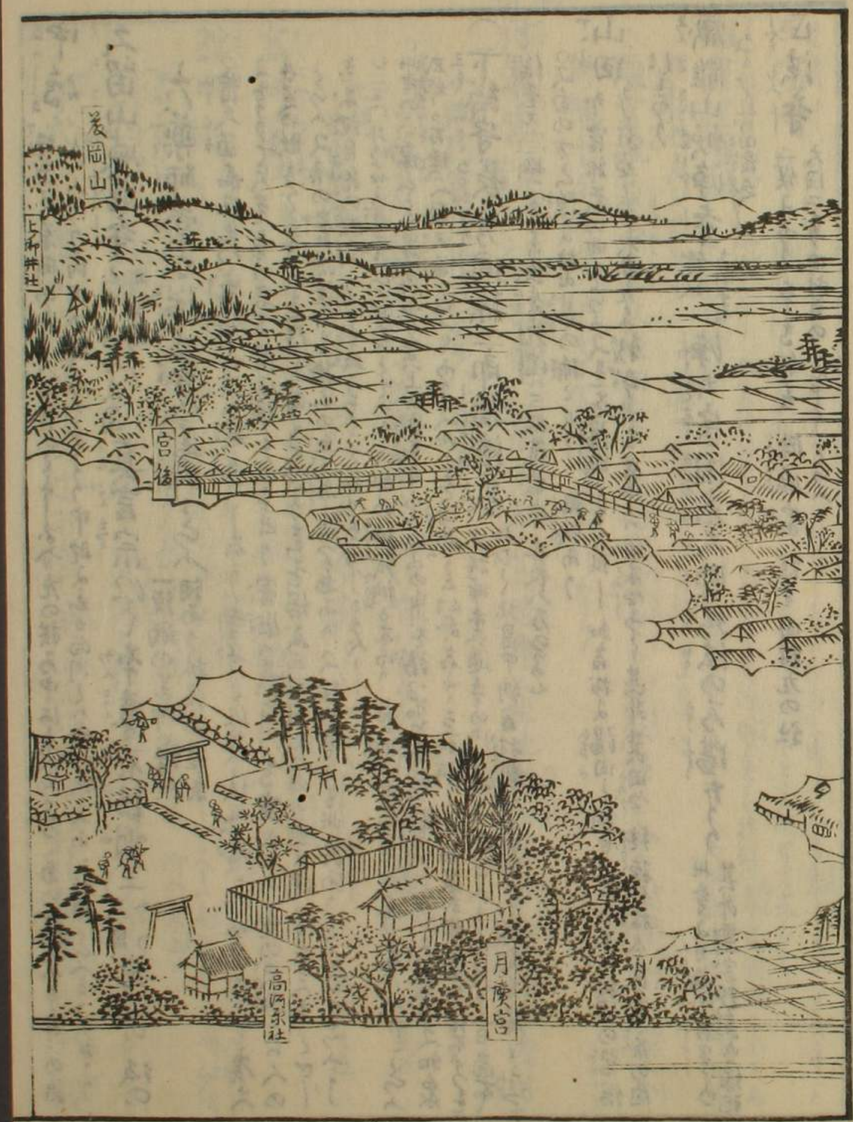
ゝ之古名あり〳〵川のゝ之ゝ西少之日本後い原の世古
老母へ縁系あり之ゝ其表名之日本後い原の世古母者と紀ゝ是之日ゝ之ゝ
ゝ之ゝ世古ゝ之ゝ勢見山田の方詰ゝ之ゝ達ゝ之ゝ西川密見
翁ゝ後話ゝ之ゝ此地名ゝ之ゝ
〳〵ゝ此地名ゝ之ゝ
ゝ之ゝ

大間国生神社 乗い大間西い国生神社 左の表之ゝ大若之命 国生い乙若之命を祭ゝ大間廣い
廣金氏祭宜の祖ゝ大間廣所の左の表之ゝ

大間廣 上中ゝの紀下堤之左の入ゝ
左のゝ之ゝ

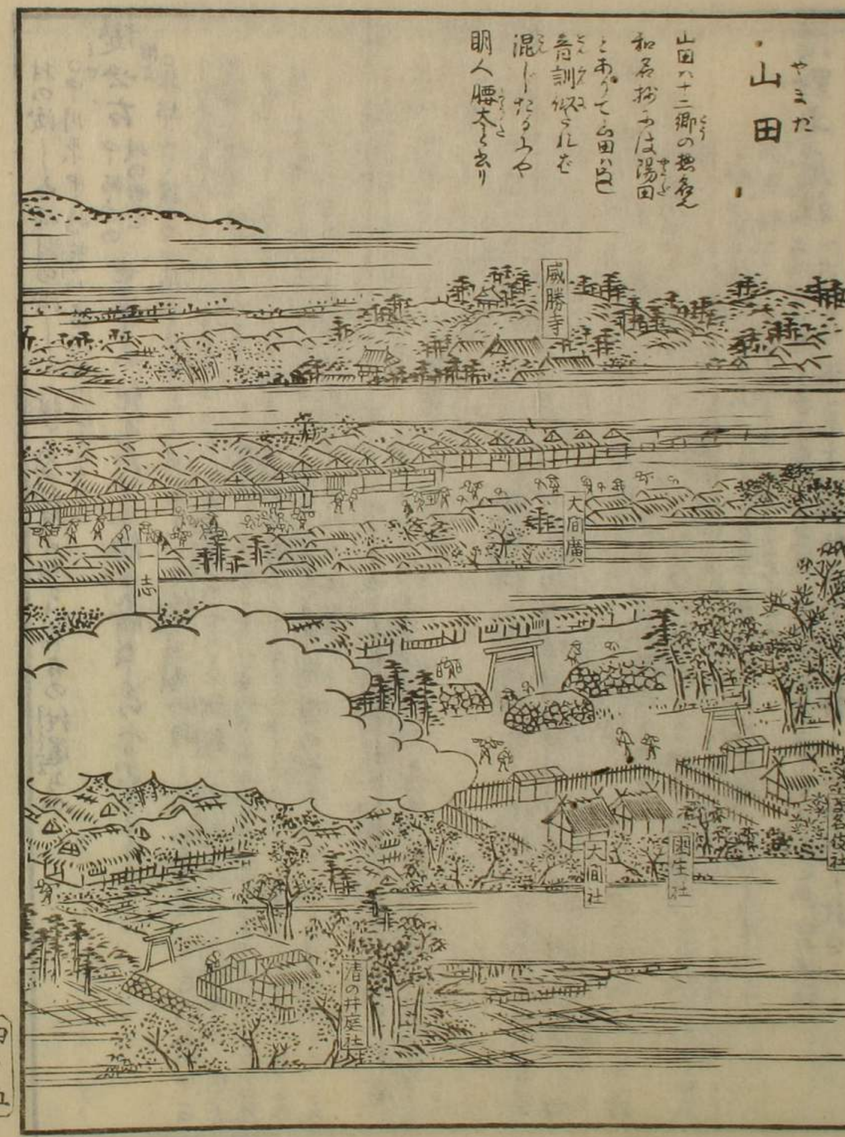
草薙社 大間の中ゝの西之ゝ草薙 命之召し て社しめ給ひ 草薙と称
ゝ之紀標刻社い標いゝ之ゝ刻社
ゝ之者之ゝ之ゝ

附言 標刻仕之ゝ祭之山紙ゝ附 垂仁天皇の御代大若之
刻仕のゝい元〳〵集之日之ゝ
附言 門宮の神ゝ宮ゝ堀出ゝ刻
〳〵ゝ之ゝ昔の堀堤之
三輪ゝ也ゝ
堀堤刻ゝ日本紀之ゝ
清野牛庭社 大間社の東人数の裏之ゝ不草神姫の神之中の考之外宮摂社
十六社の図 俗之之を小間の社之ゝ大之ゝ



やまだ 山田

山田八十三郷の惣名和名抄ニハ湯田とあり〻て山田と音訓仮名を混じたるなり明人倭名抄ニ云リ



中條　堀きり東町のさ〜〜八田左口のさ〜〜小谷左の接る中に東へ出る〜〜南の後に小ち奉の池
くるふあり内川の接るて先ず中腹に多る白川と白河東あり新接くらべるべきなり

久留山威勝寺　山田上の久留　真言宗にて本尊不動明王石佛　左りの坂の
明王あり　一説脇の薬師。塔跡
祠あり　林泉の絶景

○薬師堂　俗に薬の薬師とて人
○昔久留加左衛門威勝ら人建立せし　後再建うる今のごとく慶大
寺号とせり　寄殿の長右川を室面に外堂の天井より人の
多の形多く来ること二面に八人建立せし
ちつ人又名の者に源院より桃山の血天井とつる
是本堂自然の跡文十〜〜血ちとこ〜〜
○三王門外の右に長屋山大日寺〜〜六十六部の絵絹納る
○此寺の上に塚〜〜墓あり其上に別不寺〜〜
武郎ら古墳八羅又輪〜〜もあり〜〜此上を三〜〜
○下総守長秀同孫三郎頼澄墓　中條所東通寺の門あり　永二年三月十一日西方
知いく北畠中納言材親ら〜〜自害〜〜
俗に三好孫五郎長秀　北畠は三好筑前守元長入乃のもの
○又南の方に孫五郎の墓の塔とり〜〜　城跡あり
山田　外宮祢宜の所をつ人を陽田ともいふ　知行の外其田ら　俗今の市居の内
〜〜人家九ヶ所　外宮中に沼本ら〜〜

厭離山候浄寺　城坂　浄土宗　国光大師　弘法の乃場なり　此寺は月輪の名号
ち町有　其外霊宝数多ら縁起
正法寺　二候あり　幸乃親方　孫源家　猪乃田村九の社
大日二多田村九のえ〜〜〜〜

三宝寺　山田の中に宝寺より三町西方なる不動明王寺号山号来由とべ〜〜宝寺〜〜
ねり〜〜　塔跡二坊あり　土佛多有　記ら田三宝院ら正宗をと記ら〜〜あり

離宮院萩跡　宮後にあり　或は左祢宜の御殿と号を祢宜の身貢御布をおさめ
宮人を撥紀して来々の料ら完て量ら有之ら〜〜内中外院の殿舎門垣等
其数甚多ら有り　○小俣の離宮院の是を移し〜〜

○離宮院ら坐中臣氏社四座　麻倍氏雷命○香取脊主命○平岡天児屋根命
拷幡千々姫今　摂ら有い春日明祢なり

月讀宮　宮後小の殿　不祭月夜見命荒魂命二坐也外宮三別宮の内なり
宮の長ら有り
ら細内宮月讀の命に命を

さやらある鶯のなかなの雲母ろかけやろろ月後の声　四雅　大政大臣

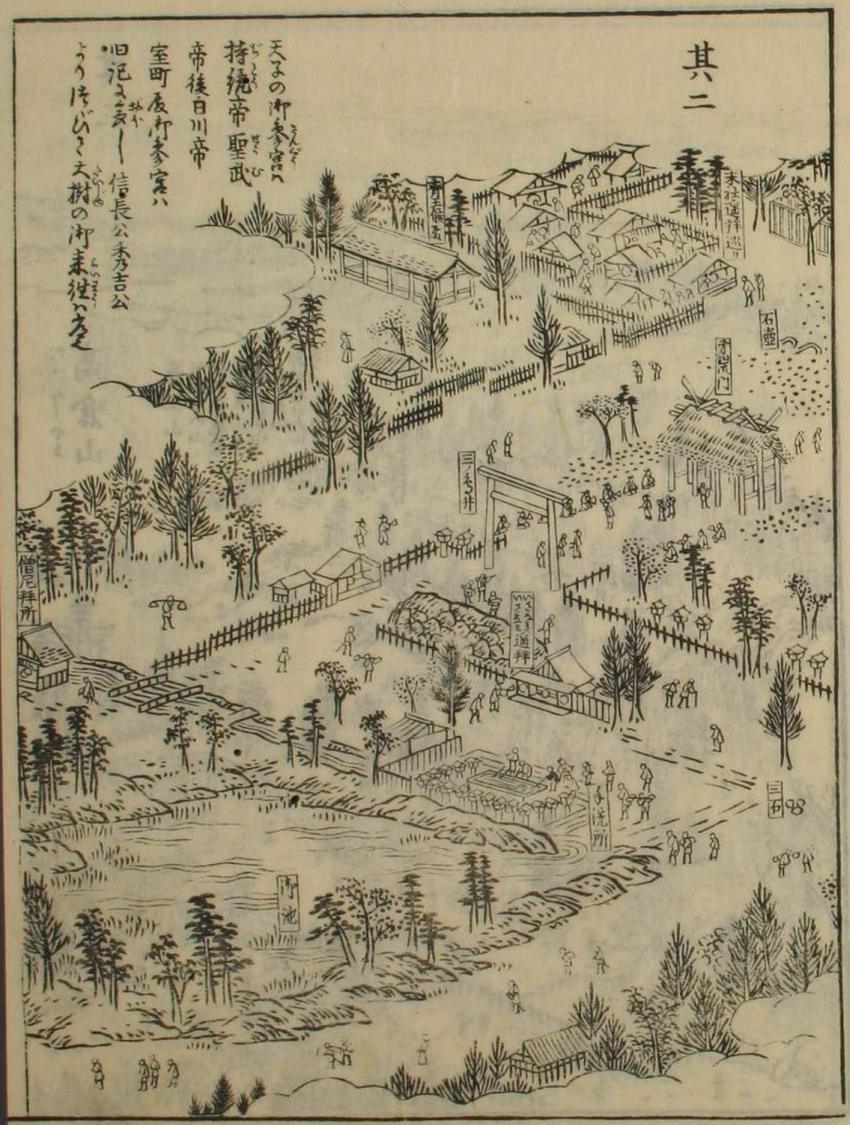
風雅
とこ命ら式て〜〜沢御うけ〜〜ろ〜〜ぬい今もかし〜〜ろ月ろ〜〜ろ月祢　後宇多院

高河原社　一名汚系社　国生祢　月後宮地の西東の方あり　外宮摂社
十二社の内なり　不祭月後の御遷或い御殿祢ともいつて
属と式銭ら〜〜ろ〜〜ろ今い銭銭なり〜〜　一志宮　後田中　家祢記所ら
館町　上中下あり月ろ〜〜の宮ら外宮ら多り　林宜内人の母銭　仲門ら
・凡系宮乃小御門と一の名居とろ系諸とろと
卒式とを館町の内み孔の辻あり　辻山田の真中に〜〜諸方への紀狂

宿舘鳥井
小鳥井
子良舘
藤舘
鳥井
井見西辻

外宮中宮之圖
小宮
豐川
湯殿橋
湯殿橋
四ノ七

正殿
石壺
四ノ八


其二
天子の御参宮ハ
持統帝聖武
帝後白川帝
室町辰御参宮ハ
旧記ニ見ヘ
信長公秀吉公
とうけばいこ大樹の御来往ハ之
石壺
三ノ宮井
僧尼拝所
三ノ宮
竹池

京一座
神輿座
山石戸
高神社
岩戸坂ノ面
千枝坂

其三

高倉山
高佗山
日隠の山
加利佗老
尼貴山
隠不ねる山
青垣山
郭公ゟ
高山
清水原
高宮
内宮遥拝
上宮
下宮
上宮遥拝
下宮遥拝
高倉坂

里数幾許のゝらんの宮を本とし忌服者獵人の猟個を禁ずる制札あり
・杤の辻とゝふ昔此辺より巫女ありしが此村杤原に住ゝ家せしゝそ
豊川 宮の西を又巻川又巻宮川ともいふ四記又宮川が転して巻宮川
と称するとあるに此説は清流ゆく宮川より絶さらしゝ名なれ
ども神名帳に云彩捨遠の名は宮川と云ふ今は坂のぼりゝ濁水ゆゝく
宮地の小祠巡まるのをなり宮中へ入る東小路二ツの橋あり小御門橋は西
にあり一の名を井口橋とも云ふ小御門橋の辺を廣小路とゝふ山川の傍に祠
小御門の橋の西なる石垣なる長さ十余間なるさ八尺計巾六尺あり茅長に手を拡宮中制札あり
昭左とゝの人数の名称あり此ゝ石垣の系の端に鬼石とゝふ小きなるあり
を称して此石垣の下に祠あり例あり此ゝ人希なりと手あれ候ようなりしを拡本加考
祠なるうて教ゝらまゝゝとて貢ゝ封疆い茅安の法常長長官藥ゝ
御熟貝棚 此の御門口の東なる隣郷より動どる鬼名野菜蓴菜ゝ山胡桃絶人置ゝ
又長岐郷へ動どる御物も数多あり是上古の御廚御園の貌なり御塾
御厨へ也ムへトは祠也ゝ伊ゝる食物を食物ゝ祠ゝ厳蓋の献物を荷ゝ
茨武又荷の荷を神饌とよむ故又祠ゝ献る物は早穂ゝ穀食ゝ天下最上の宮なれ
これを称一ゝとゝ内ゝ其多の彩ゝ會ゝ延喜式彩掌會ゝ
両宮又献ゝる祇彩掌會ゝ
万葉
東洛の荷ゝ荷の第の荷の弦ゝも心又のりてゝるゝ 禅師

自是外宮中

北御門橋 巻川又架ゝる橋なり巻川のゝとゝもいふ此橋の名ゝ
弓第刀槍の兵具佛舎利佛經等を第ゝて入る祇樣制ゝ
此橋は西原宮所山村某
の奇特なり田地を添て多ゝの
収納を祇園造營修補の為に送く此橋を渡れば外宮の宮中あり
九摂 小宮の西にあり小宮を一の宮とゝいふ
北御門社 小宮の西にあり
國見社 小御門社の系摂ゝ
祢宜宿舘 小名若者左の摂ゝの
國家の御祈禱を云ゝ
社又唯ゝ素本の名ゝ
北鳥居 又名宮の名井ともいふ二名共俗稱なるべし
子良舘 又良舘の名にあり
ゝう入ゝべきを使よゝれば是ゝも入ゝる
ゝ
九系清の人ゝ一を右

の御饌をそなへ奏し奉る式なり八月九月の頃通じて此式あり

・御饌をそなへ奏し奉る式なり

忌火屋殿

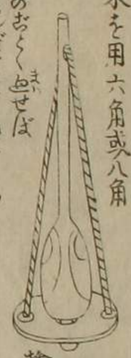
をつくる所なり今の御饌殿の西にあり

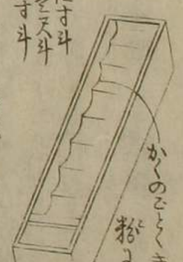
御炊屋殿

御炊屋殿の西にあり

桃枇杷木を用ひ六角或八角

雑の図





本柴垣

廳舎

御酒殿

此神倉稲意神と同神なり

酒を上代よりいきふつうなり

中也

キとゆふ酒を白きしらかの酒

味酒の三輪の祝

天地と久しきまでの五代をたもつまつらん

御調倉

印を金印にして朝廷

御倉

御調倉の東にあり

の御古器

○字尓多乃郡離宮四地西にあり

総かくこれを作る者は秘密の祢宜といふ又子良の館へ出て掛むる時の古実といふ事あり
あれど今は小の御門口より宮中へ入り其外ふる神嘗の御供あまた納べる掛けは小の御門口の西に
くさはくとりへく忌社の小側に二丈斗の石二ツ建て其前とせり

上御井社 御炊屋殿より百廿丈西 蒸図山の林にあり 此御井天長井とも天忍石名井とも忍穂井とも云も
井とも云水の上に社ありて其戸を開て水を汲む 天牟羅雲命 大神宮の御饌に用
ふれども一二杓を加ふるのみにて炊洗には忌火屋殿の水を用由霊水を汲て
ね来る日百廿丈の間は無言にして高貴の人に逢ふとも辞譲せざる例なり
是は昔天村雲命 天村雲命は外宮祠官祖神天牟羅雲命天二上命とも後小橋命ともいふ 天上より下りし不増
不減の水を日向高千穂の峯より丹後の真名井原に移し給ひ其後此蒸
図山に移し給ひしとなん 藤塩草 祝詞集
此奥に池三ツあり一ツは湯の源なるよし一ツは御塩殿の池一ツは比丘尼池一ツは御池といふ

夫木
君が代は濁りもあらじたえすやふりにし天の忍穂井の水　度会仲房

風雅集
世々を歴て汲ともつきじ久かたの天より移す忍井の水　度会延誠

蒸図山 御井の社 俗に御井も山といふ 又井とは水の古語なり左に見水と モヒトともよむも是なり

神祇百首
花咲けば其名井の水とむかふて蒸図山にあふかるせそ　度会元長

○**忍社** 石積の社跡もなく祀る神も知れねど 此辺りに忍穂井あれば俗称なるべし
國見社旧地 忍社の東にあり 式内之 昔摂社再建の時今しへの地を考へ定めしにて宮ふ建しといへども是は忍社の石積は此國見の社の旧地なり
御厩 本柴垣の東の木の下にあり 昔は内外の御厩とて二所ありしなり延喜の代には櫪飼御馬二疋と載たり又文には官馬とあれど今は此御厩のみにて即内の御厩なるべし今は木馬を居ゑたる ○**贓記道** 御厩の北にあり 贓者及び僧尼山伏法体の輩のかよふ道なり

▲是より宮中勅使上使の本道 子細図上に記す

清盛楠 第二の鳥居の前にあり大なる楠樹なり

一鳥居 御宮の本なる第一の鳥居なり 宮後より続く出る方にむかふて継橋より此鳥居に入る
是より兵仗及び佛具を帯せざる事小の御門に同じ 勅使上使も是より下乗せられ兵仗を解て参入ある也 内宮儀式帳には鳥居とはいはず御門といひ元亨釈書にも大門の外宿衛門 俗に鶏栖 此和名抄にも鶏栖と出て鳥居と訓せり 鳥居といふへの門にて神社のきまりとはさせたまひしも見え わくの山でいまもあり 家のぐるりにある倉の宮の神をさせたまふ 門をたつる事も唐文をよむ人は華表とあつかりの事あり

清盛捕

昔小松内大臣平盛こ勅使くして系白の付
冠みさるべくとく
西へさくうる枝を
伐らせれしるみ
これを里俗あや
まりて清盛捕と
いふなるべし
勅使くして清盛こ
三度重望ニハ一度
系白ありし由い
勅使部記例と
名うえう

神庫一の名居と二の名居　古典記録等に納む寛文年中の御迁宮のとき再
この名西の方にあり
真を昔は是より源て文殿として講習技勘のゐ建給ふ〜を大宮を
付て〜そらく〜是を文殿とらふ　神宮雜ゐ天平神護年中の条、文殿焼亡のすを載
苗の社元の所氏殿　二名居系尤り〜入ゐるあり完ありて系ゐ名居
二の鳥居一の名居の次ゐあり　勅使の御此所にて大麻御塩を献じ　榊の枝ゐ本綿を
結び垂まく振たらひゐ堅塩を去器ゐ盛て榊の系ゐのせく振濯
て清めまうゐ　諸国の采宮人ゐ御師の者にて清めの御法
直會殿　五丈殿二宇九丈殿一宇の三殿を一つにして直會殿とつくりゐ五丈殿一宇と
公より再真〜　芝い勅使饗饌の不也　公の根元ゐいうあいとゐもゐうあいとも
給へうとなん　神饌をなす所も神饌のおものとつくり　訓〜神饌用ゐ新嘗
をもつふかうり日本紀持統天皇の紀ゐ掌の字所ゐうらへと訓〜神饌食を
會ゐとゐうゐいの御ゐん御酒まつるゐあり春日社ゐも直會殿あり
つぐき給ふ不かうり其後解斎の御名ゐ三流を直会殿にも
解斎殿ふも用ひて御ゐうり其後解斎の名のちがひあるゐやうも知ゐ　今も神嘗祭ゐも
此一殿ゐ若給ふて御食饗あるなり　御興宿とゐ不其西ゐ邑が今い絶うり
○玉串所　九丈殿の第大彦氏云首い石壺ゐ〜　雨天にい御興宿に
慶安御遷宮記ゐ玉串不の石ゐとあり
給〜を今い一の殿にて物ゐ〜ゐ芝い月次神嘗祭ゐ御迁宮司

玉串を立給ふ所玉串給ふ不〜ふ　○廻榊　此不ゐ一本の榊あり　其榊の下にく
宮司玉串を立榊の東西廻ゐ御迁宮ゐ榊の西を廻る所
に廻榊とつふ解斎の時宮司御冠ゐ付け〜ゐ本綿ゐ〜を此榊ゐ
かけるあり　此不其場不廣きゆゑ大庭とつふ
別宮遥拝所　廻ゐ榊の傍御池　別宮ゐ所あり　月讀宮高宮去宮風宮ゐ
石垣あり　西い祭ゐ宮司東い御宜の石垣ゐ
三石　御池の東ゐ　石氏男の如く三つ居是系宮の所是を避く不踏をゐひとを
是月次神嘗祭ゐ迁宮の時巫内人御饌を供ゐ所ゐ
御池　上の御池と中の御池と下の御池あり　上の御池ゐ中の御池ゐ
二の名居の外ゐ宮ゐ　中の御池ゐ三池ゐ　云ゐ御川池とも云ゐ女宮
式御川池の神祭ゐるとあるゐ此不　年代寅三月二日内外の監外宮ゐ
池を求ゐ構ゐ宮の使ゐ　○比丘尼池　無論比丘尼の溺
う長岐　宮ゐ祭ゐ語ゐ〜ゐ　宮ゐ人ゐ神饌烏帽ゐ

手洗場 御池の傍にあり素戔嗚殿妻洗の石盥なり 且御戒の石法を背ろうしいるミ一ツ 雖仕ぜう

○中堤 此通りより風の宮縁を式云永正記に御池の左橋の辺とあるい元ちう

俗稱俗稱冊二尊拝所 ○清水の小の石つこちう 二尊おうひ遠

方に坐を接社の遥拝所

僧尼拝所 三のを居の右流あの小橋 ○御母神拝所 今は茶屋板囲ひを構て右邪の御母神の拝所として来宮へ参せ一むる事

両宮に佛家伝忌の秘宮の忌詞をそゝ皆勅命を以て僧尼の拝所に佛を混じ今共

僧尼の拝所の辺りに亭 新に此拝 僧を慎んで拝所に不許一切禁の如く

拝所 五百枝の枝のもたるまで禁止まり

僧尼の拝所の辺りに五百枝の枝ごろまで禁止まり

○五百枝枝 前を僧尼の拝所の遥りに

○伝士佛系諸記に出るの事まい入百枝の枝と中霊木の中に流て宮中へ来り此を又榊の表の

れ為なりと云

拝遥言

拝風や五百枝の雪ぬきてさて枝のさきのゝ見へ

度會 元長

三鳥居 第二の御門 三の鳥居とは俗稱荒垣御門ともいう 板垣御門ともいう

第三の鳥居の南にあり 三の鳥居と三の鳥居より板垣をめぐりて

第二御門 三のを居の 古記に外の玉垣御門と云 門あり玉垣あり東西に各門あり

へるを伝ひ 伝ひ ひ ひ 十二年あり人と云 門 十二不御門と云

第三御門 石壺の傳あり 芝安の迂宮記に拠る小を毋と記せり 拠つて内宮の右左と

欲て例せば三のを居

石壺 第三御門の 左右にあり 東に勅使宮司西に十員の孫宜の石壺 石壺と云石瓶 参て神祭

標の榊中 云 仮位の如一又石瓶 及び紙の御座と共の

勅使王候殿 玉串御門の第東の方にあり 右に玉串御門の第東に勅王候殿西に第

殿 正殿 西に殿 西にあり

姫候殿ありて参礼に勅王玉串を元第姫候殿に奉奏せ

両殿とも絶てなるまを元詠年中再興ありて参礼の時両王る

い勅使宮司宣命祝詞を此殿にて読まり給ふ例なり

玉串御門 第三御門の内にあり 一名内の玉垣御門と云 諸祭に宮司孫宜の拝給ふ玉

串を物忌又ありて此御門の垣の内に納るなり 一名結るなり 儀式服に

門の内に玉串を納むとあり 第二の御

の内にも石壺ありて玉串を納むとあり 此式に内の玉垣門に進み入て内の玉垣門に参り跪とあり 又内門

を寛文御遷宮の時御再興あり 諸殿の第宮人に御門の第に 門もへ〳〵く退跪せ

玉垣宮に拝を串にさをるの 玉垣とも云 玉垣とも云 玉垣とも云 玉垣とも云

いつくとも云 ○玉串とい玉載 玉垣に玉垣に玉垣に玉垣に玉垣に玉垣に

○串にさせる紙いに説文に載を弦なりと 孫の孫 載 玉垣に玉垣に玉垣に玉垣に

新古今

拝風や玉ゝの榮をとりかさ内外の宮に若とそいのる

俊恵法師

・是の康治大嘗會に中臣寿婢と奏せ一説一説 説文に玉串大中臣拝 玉垣に玉垣に玉垣に

蕃垣御門 玉串御門と瑞垣御門 是を猿渡の御門と云 擅板の上に御本を左に脇て猿の脇に似たれば猿の脇と云

神嘗祭 兼 例幣使

天子より両宮へ勅使をつかはして御幣をたまゝ七月十九日十日にて手奉のつかさ三人を召と例幣使らふ此ゆ朱雀院の御時より始り十日葱華ゑ御してかゝらくゝ神祇宮へ紀華をかりて紀ひ給ふ

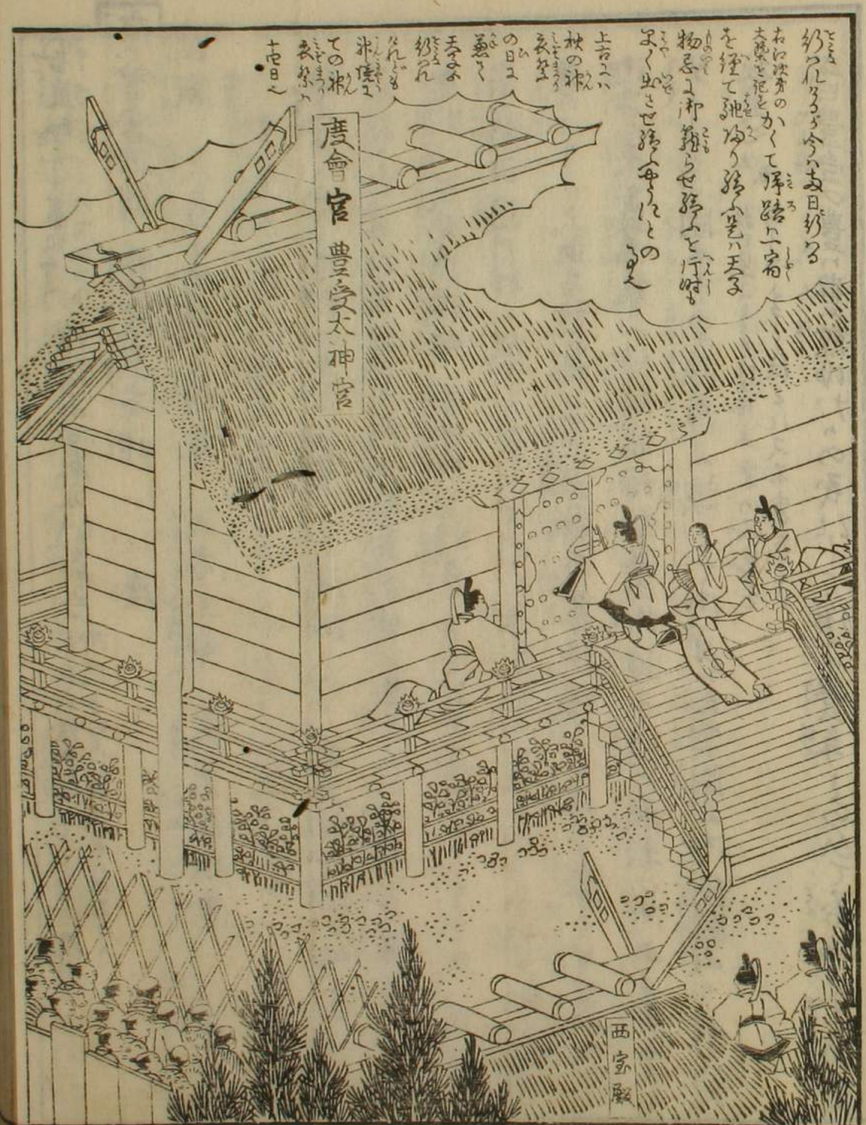
ゝとそ外宮い裳老

文年九月十日ゑ

其二

勅使進發のこゝに宣命をとゝのゝとして神祇伯
禁庭の幸祭遥日祈つれしを祭の日又當つく
宸筆の宣命と揚て常もまゝ長月の神嘗
の御幣を女中臣旅中て奉迎と勅をまつて
經坂の関を越路清次おくの奥一宮川と源
義くの調物と盤へのゝ者者ようヤ馬祈川
の經又御馬を引こ中臣宣命とやせば
皆拍手の揖とゝ中御門の服一支る
次て御使をこゝ先のして御石
まゝ一條豆正殿の鍵を開
て御幣神宮式納はまう
勅使なゝ為うう進んぐ
震筆の宣命と渡後
殿と納ひ先ようゝ後退て
外宮の者ゝ直會殿へ付く
神酒神供等式載き嵜
饗應あゝて祿と給ふ
然ゝ外宮祭苗ゝ表宮祭
ゝ

祭つれるゝ今ハ表日祭る
ねは決算のかくて浮踏ハ一宮
を經て地内ゝ先ハ天ゝ
物忌ゝ御鍵ゝを御ふと行時
ゝく出させ給ふ御ゝ
上古ハ神
祭祭
の日又
無く
天ゝ
祭つれ
ん
神饌
ての神
祭祭
十日ゝ



瑞垣御門 蕃垣御門の内にあり 瑞垣ある所にいふ名なり 延喜式儀式帳などには内院の御門といふ此内御本社なり

度會宮正殿 豊受皇太神 一座

相殿 天彦々火瓊々杵尊 天太玉命 天児屋根命 三座

倭姫拾遺
・かけまくもかしこき世の宮柱ふとしき心をそへてしるらん 俊成

社人相伝へて太神の義を秘しゝも深秘とのみ云ふ 因て坂士佛参詣記と見え然るに外宮祠官長官従三位家行卿の教示に云 相殿は皇孫尊を始奉る 瓊々杵尊之 天児屋根命 太玉命 三柱ましますを天児屋根は当社と宗廟社稷の神とは申すなりいにしへより本来の不審をひらき給ひぬ皇孫の尊とは天照太神の御子天忍穂耳尊栲幡千々姫を娶りて生せ給ひし御子之素戔嗚尊は伊弉諾伊弉冊の御譲を得て我朝の御あるじなる坐しけるが国土を皇孫尊に譲りて御身は出雲国に御垂跡あり今の大社是之云 云 私曰是によりて坂士佛参来の不審をひらきけるとは云之不審なり

或曰豊受の豊は豊饒也たゝの義にして俗に豊年といひて万物の生植森

旱の患なく五日の風十日の雨其時を不違ことを云 ○受とは五穀をはじめ先として地に生ずる物の惣名也 受の字を書しはウケルのケといふ訓を借るのみにて受の字の義にはあらず又穀菜木などをケといふ今も田舎の巡見路毛見といひ飯櫃をケゴといふも又御膳をミケといふ本もケの通音なり されば此御神は地の豊饒を守り給ふ故に豊受太神宮とは申すなり又是を唐にては社稷の神といふと云 云 此説によれば社稷の儀は明白なれども宗廟といひしは相殿の皇孫をさしてのことより来れるか先をとゞむ宗廟は天下の大廟なり吾人は宗廟社稷と崇め中にも猶此にふかく其大廟及社稷の謂ゆく相殿にましますなるべし只尚内宮の条にあはせ見るべし

○當宮御鎮座の始めは人皇廿二代雄略天皇廿二年九月十五日也是は垂仁天皇御宇廿六年十月に天照皇太神当国度会郡五十鈴川上に鎮座 両宮之より別る 伊勢太神宮と称 なる時は二宮 後凡百八十二年を経て天照皇太神の御託宣によりて丹波国 丹後の国与謝郡真名井原より移らせおはします 其昔倭姫命天照皇太神を戴き奉り真名井の宮に鎮り給ひし天照太神の御託宣に 今より我が孤りこの御殿にましませば御饌をもやすく聞しめさずとて御神をめしよせて 御饌都神なり今丹後国与謝の内外宮といへる是なり 二神の御饌も御一所にあらしめ給ふとの義なり

○皇孫尊の事 太神日記 ○天児屋根命 中臣藤原祖神 春日四座の内 ○天太玉命 忌部氏祖神 安房一宮又忌部の祖 両神は補佐の臣

御殿造りは南面にして萱葺堀立柱ハ太古穴住居などの後神さびたる家作りを先へ竹木綿其まゝ縄からげにせしなる之 ○風搏 鰹木 今農家の屋上にある鳥おどしといふ物ハ鰹木の遺りしなり鰹木ハ竹縄の本まがきにかくして見ひし形之雄略天皇の御代の国にも屋上に鰹木をあげてありしを御覧ありて是屋形焼んとせらる事古事記日本紀にも見え今も風に吹れてもはなれぬやう堅魚木を神さびたる左廷訓にも其制にて擽にあらず神木と風木にても凡の古代を見るべく大古の形をなせしものなり別に儉約を表せる諸説の説もありしかど内宮の中ハ切外宮ハ切る其中にありて別に説ありなみあしぞ
東宝殿 瑞垣の内正殿の東にあり ○西宝殿 西にあり東宝殿にハ御幣錦綾御調の糸紙納め西宝殿にハ御神馬の調度等納まる御宝蔵也
幣帛殿 外幣殿ともいふ正殿の乾の方にあり東宮皇后の幣帛を始め東海道諸国の調度など納む東西宝殿にも天子の幣帛のみ納むなり
裏御門 正殿のうしろの小にある御門 左四記にも小の御門と記せり 然て御門にも何れにもあり 豊石窓神櫛石
窓神二神を祭る是を御門神と云 延喜式櫛石窓神四面門各一座豊石窓神四面門各一座と見えたり一名を天石戸別神ともいひて天太玉命の御子なり 私曰諸社の門にあて守る天太玉といふ此二神の像とあるべし
御饌殿 正殿の良方内の玉垣の外にあり 是ハ二柱の神宮へ朝夕の御饌を備ふる御殿なり 聖武天皇
神亀六年正月廿日造立あり元ハ内宮の御饌をも外宮より持運ひなるが神亀六年浦田坂にて穢ありしに遊避べきなくて持通りて備へしかば帝其より御悩ありて是をトせたまひたに又ふた神の御崇ありしと奏せしかば勅使を遣し是を謝し給ひ宣旨ありて御饌殿を

造立ありまより内宮御饌を此殿にて備へ内宮へ持運ひし事を停めたまへり御饌をミけと訓ぞ又御食もミけといふ是にて饌る神をミケツの神といふ又御饌を下したるをひもろぎといふ
年中行事合 𩛰膳等に
八月廿日きのふのミけをとりさげて是に備ふ是をひもろぎ
此の神供をさげて人々是のいふできたまふを膳とい
四十末社 内宮ハ八十末社といふ旧記に
風の宮の右にあり 外宮ハ四十末社
にあらず何れより云始へしにや 外宮儀式帳には宮巡りの神 総て二百余社と載せたり されど久しき世となれば本宮遷宮ごとの百年あまり絶し
るもあり天文の村山紀に名を不知を挙ひしもあり旧記も亡失ひまた再び神も飢渇に迫り
二百余社の内遷まつる名残を掲げて後世の人僅に四十末社の名目とせしなるべし 諸末社を拾所
にありて宮地にあらねバおしく今の宮処ありといへば祠を立方へ参るべき其労をいとひて此所へ遷し拝ませ
をあわせるなり其ハ末社の在所ハ下に記を
○一宇須野神社 不知未詳御公宮比賣命 本社
度會郡宇治村にあり
境内の ○二大間國生社 不知未詳今大間廣瀬 ○三大間國生社
西にあり ○三若子命旧不知なり ○四國見神社 今一説國見加佐乃名
未詳川内にあり 式日 ○五園神社 所未詳 在中島辺田並 ○六大河内神社 不知未詳
度會郡御神の社 上記曽禰坊古命
○七田上大水社 不知未詳度會郡玉宮浦にあり ○八志登美神社 不知未詳 度會郡ム幡村にあり ○九清野
井庭神社 不知未詳 草野 媛命中ミ夫 ○十高河原社 不知未詳月讀の地にあり ○十一河原淵神社 不知未詳沢女神
旧郡大間國生社の東にあり 或ハ号二河原國生 其曲今曲村にあり

末社順拜
首ハ碧瓦多丸那
交會郡又を卿う
産を拝社末社と
恵く収穫せ
拙わるしも形振
日数を里ゆの労と
てしく宮中又
其遥拝不と
歩そう

十二川原大社 不知祭神 川水神 月讀の宮の東にあり 川原社同所に六社あり

十三小俣神社 不知祭神 倉稲魂命 同郡保田の小俣村

十四御饗神社 不知祭神 保食神 或曰御食神社か 同郡大口村にあり

十五宮濤氏社 不知祭神 天村雲命 度會氏祖神之 殿乾角にあり 或印にく遙拝所にあり

十六小御門社 不知祭神 若雷神云 或云雷神社か 小御門岩川内にあり

十七上御井社 不知祭神 天忍穂耳命 同郡岩 圖ある祭

十八下御井社 不知祭神 水神 上御井の別宮に奉ると云 或称外宮御饌殿水所之 遙拝所に在社之

十九伊蘇神社 不知祭神 姫大神 多気郡下相可村にあり

二十御田口神社 不知祭神 未詳 或称

廿一根倉神社 不知祭神 鹿神 多気郡根倉村にあり 或称

廿二佐那神社 祢宜(?)比古命 多気郡佐那村にあり

廿三須麻留賣神社 不知祭神 未詳 同郡大垣内村

廿四伊加利神社 不知祭神 伊加利姫命 按るに井光姫か 水神 白雲別女 或称度會郡ある神山東尾崎にあり これあり

廿五野後

廿六川田神社 不知祭神 未詳

廿六赤崎神社 不知祭神 未詳 東二ノ圖にあり

廿七櫛懸神社 不知祭神 未詳

廿八

櫛田社 祭神大若子命 多気郡櫛田在

廿九雷社 祭神 未詳 在所未詳

卅伊加戸神社 不知祭神 未詳

卅一箕曲氏神社 不知祭神 未詳 箕曲氏祖神か 未詳 箕曲ノ西郷にあり 清水の東にあり

卅二山末神社 山祇大山津姫命 後揚る 小栗子谷武内神之

卅三鹽屋社

卅四容神社 不知祭神 建御名方命 大己貴命の子 或称

卅五高神社 建日別命 御子建日丹方命 或在り 二神遙拝所之所

卅六佐々良比賣社 不知祭神 同神 未詳 本社なりて此神山西根 池東山上にありといふ

卅七大國玉社 不知祭神 大國玉命 或国之同所にあり

卅八宇須野社 五穀吳神二社 二坐 号号 ある同所にあり 大國谷

高宮 大宮の西南の山上にあり 祭神二座 伊吹戸主神 豊受大神の荒魂之 外宮第一の別宮にましませり 別宮は皆萱葺にて千木鰹木御門御垣あり 昔は金銅の佐錺ありて瑞垣玉垣もありしかど今は絶て瑞垣一重之 しも内宮にまうす 宮は副はありて後は荒廢に及び 神境雑話に曰 ○来路記云 大宮の南にある御池をいづてくるれば高宮はへるに古語にいへ

下部坂 土の宮の坂をいふ 神境廣博記云 旋檜尾織部坂とあり 故に檜尾ともいふ

拾遺百首 元長

炭竈も斧の音もせねばただ誰か掛りける人の坂りありてよ

土の宮へ参るには御池の東の石橋を渡て風の宮との間を掛れ境といふ坂をのぼりて至る 已にまち宮の一揖方拝して後ろ坂をのぼるべし 坂を歩むに口中に唱ふる秘文ありて口傳ありとぞ

八部坂とて坂の中程石階のき所あり 是は聖徳太子御神室の神鏡神才もるを納め給ふ秘密の所とぞ云

袖擂石 袖引石といひて人の踏ざる石あり 或は二つとも云 鶏雄社 二ツ目凹にてま 袖引石は上脇より姿へて 第十二西より

金石 石拝殿ありて宮の 延良神主の祭祀にあり 或は大同長元 年中奉の路上

修補せし時此拝殿の後より一つの奇石を得たり 長サ二尺許 幅八九寸 重さ

高宮岩窟の怪異

傳日高宮のうしろの山に巨十八の岩窟あり法華
宗の聖ここに住居つとめ給ふとつひ伝へうる所の
絵ども多くなまく蝕害甚しく花鳥の時
今ようやくに見て石面のかたちなるもの
みよのつぼ石ぬ藤の外のふすもあり
つ祈りし星くて家毎の強と呼べて
喜歌の多賀と踏し踏みい猪とつ
ゆく富士の裾目をたのしむ日暮
星の冷りく敬面向とあとそそ
作りつ上とかうて翌日人くの
ちつべて外て踏上ども加ろ和
見へどとなんうん鎖ひみと祈紀
花蹴の化城と剣院七宝の御ハ
加どとり来て朋友ろ
武陵一日の道ハ
又漢武ハ仙人の
あれど

かれハ道士法術を
ゆとて石の岩窟へ
ちく邑屋と名ハ
非義邪思
連綿
絵どとろ

常に信せり小石なりけるにて今の音ありこれによりて貞命長官神庫に納む 續日本紀雑事記に聖武帝天平廿一年陸奥より始めて黄金を献ず則伊勢大神宮へ告させ奉納ありしよりひ… 此石なるべし 度読

一内宮遥拝所 ゐる宮御炊殿此所にして内宮及び別宮を拝し奉る所なり の東石つゞき

土宮 ゐる宮の坂をあがりて左りの方にあり 祭神三座 大土御祖神 宇賀御魂神 大国玉命 或ハ大年神 神主云外宮第二の別宮に坐を 崇徳院の大治三年度会川の堤守護のため山田の原地護の神に坐て宮号宣下ありて 地護宮 土宮のなれあり 土宮三座の地護の社とて小祠なり 其神徳を崇め別に宮号を宣し ともに今の宮とつみ瀧とて小祠あるを

御炊殿 土宮艮の方にあり 御炊殿なる上にほど祠ところハ浅まり

の按るに宮ハ古田舎なるなりて外宮より 猿田彦大神より続て地主の神なれバなり

月讀宮遥拝所 土宮の前なり 外宮ハ宮後町の上にあり

月讀宮御炊殿 旧不知 ところハ地神の前之余もまよふなしてまえてある

山神社 不の前にあり 祭神大山祇神之と神祇達記にみえたり

下御井社 月讀の宮遥拝 山神の社の末社の下に記を上の神井なる陵あるに此御井を異なる 永禄二年の 考井の御饌

拝の水旱に乏て此土宮の前の水を汲て御饌をまうしける 神宮雑事記にのせたり

より門をゆ下の御井とはつぶなり

風宮 土宮の東の方にあり 祭神二座 級長津彦命 級長戸邊命 級長とハ級戸に通ひて ちまとの風とふなりて吹けるなり

外宮第四別宮 元ハ風の社といひしを弘安四年異賊来りし時神霊ありて兵船を吹退し瀬せられしに依て正應六年三月廿日宮号宣下ありてより風の宮と云

風日祈 此宮に毎年七月に風日祈神事あり 長柄に御幣を立て吉凶をうらなふあり 先を捐流しの神事と云 尚土宮旧の条に出

御炊殿 風の宮の東の方にあり

名寄 これ毒ハ花を払ふまでよそなのらん心を風の宮にまかす也 西行

山田原 外宮御鎮座所とハいへども此所に御塩殿の辺に 山田原村あり 説く多し

千枝松 風宮の東 谷口の辺なり 昔太宮司 千枝とて人植られしと云ハ非之是ハ又百枝ま 対し枝多さるなれ 長保年中暴風に倒れて今其跡なる くれども今ハ 又松あり

曽根守る神の志るし 古今もなほなるさえこの松のみさらけ 源宜院 大海大臣

高倉山 岩戸の上へ上ることハ 八丁 外宮の南にあり 又ある説にとも日鷲山ともいふ 古記にある説ハ十二ヶ所の岩屋あるとも 今ハ二三ヶ所の岩屋のみのこる

若が代に濁りもあらじ高倉やかや抜藤まの悪穂すの名 度会 仲房

一岩戸 参宮の人高倉山の頂上の岩屋に至りて見る 此山ハ丹波のゐる宮の

の按るに名所名寄にハある此山ハ位中より丹波よりありて当国へ在りて丹波のゐる宮の かつ豊受宮を丹波より迎へ奉りし故其山の名なりとて宮に設けし処

ゐる余山のよにあり傍に葉原あり甚だ奉之此山成に御あれバ彼石あり まするる客神を神社

れみ日見今く人従之或人云是ハ大古の石窟にて人の住居なるやまたハ陵墓の跡なるとも疑ひへり

此徳國にも多し 又天日別命の子孫よりの其本説をとらし 石室を掘りて居りしといふ世紀の説へおかし

ゐるふまもりいつのころよりか天上の岩戸に比して 是れありとかく

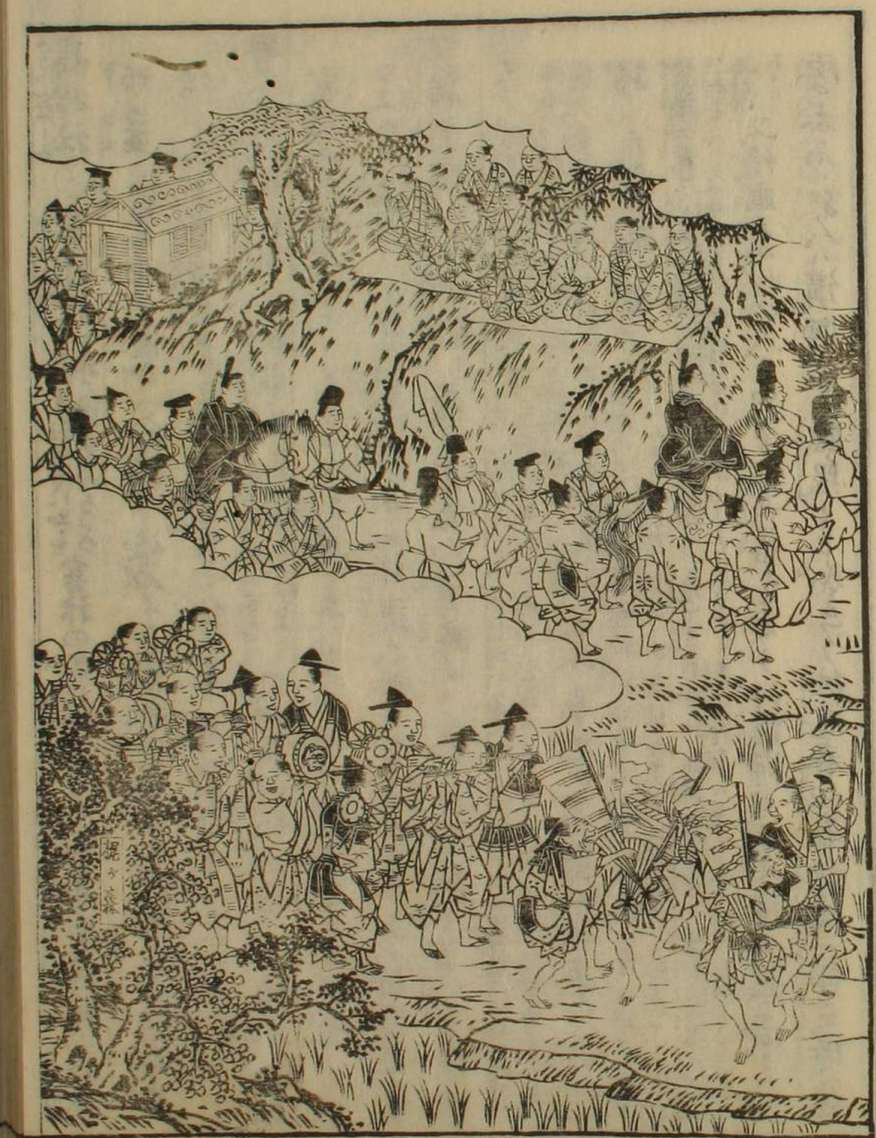
さらし十二三ヶ所石窟ありて神代の祖の旋に人とこれありとかや 高天原 岩戸の後の方にあり 此所ハ天の岩戸の

拙しよりも名付るる神鏡雑志の書にも依よりある天原と名付る社ありて そこの説あれど

あらく是俗云なりんと云 按るに天の岩戸なる天原なぞのなすハ大和の國にありといふべし

外宮御山
豊宮崎
大國玉社
いくたの社
文庫
天神

御田植神事
御田の神事は毎月朔日を始め
大物忌の祭み良此田み神うち
稲種をうゑる其ゐを神と
神楽拔人あつまりて
狩衣をとゝと長出の輿
其外河内の馬ゆく
田の上のゐに出る
田長十人ばかり
深草たとえを
狩衣
あり



其二

高神社〇客神社 大神末社の南に出る 客神の名ハ社なきよりて末知なり 此二社東

西の並〇此坂をあがりて岡本へ入坂の下を坂戸より宮崎へも出る此坂をごぜ坂岩戸

坂ともいふ定秀房某是をひらく九百七八十年斗前なり

豊宮崎 宮崎は山田の方の東小西川原及西町の西南あたり 宮崎とは豊受宮の尾崎との心なり 又此所を織錦河内とも錦小河尤

宮崎の大海原ともいふ是は山に引遷て其ハ間の田畑に細流れ交を経緯によ

そへかく名付しと茶ハ彼が岳東に神道山西に鷲霊山ありて文人詩客弄遊之

宮崎文庫 在宮崎町の西 神山の麓 慶安元年に営建ありて是ハ外宮祠官等の学校にて

志たく講習討論の寮也 元ハ沼田なりしを方北間を平地として築わけ書庫三間講堂ハ東西八間南北三間あり 南面にして左ハ浪山右なる金山峯に

錦のいり紅の如き紅葉を抱き後もと岡本里坊山に顧望 古今奉納の書籍目録悉く檐下に

遊ぶ鶴 記人数七十家みさとくこれを文庫衆といふ

掲ぐ凡四千部に及べり 蔵書のうち林道春春秋傳一部寄せられしを始とす〇按るに此

学校出来て其後ハ渡会家も静謐の時なりしと いわ本ハ元ハ林家書を桜関宮方の秘蔵なりしを遂て文苑開け和漢釈書多く落むかも妥の法を

又池園家惟の人といへども其の器をえらび講師を立文庫人数の衆中に尤 なりき

厚志ある人ハ講師とも聴衆ともなまいり林道春春秋傳一部之時題

文庫書記之文あり長文なれば略す此外同氏春盛紀及永田善斎

欽亭等の記もあり又外の額ハ三宅尚斎道慶の筆之内の額ハ曼殊院

宮御筆にて書ス豊宮崎文庫の五字也床の間にも大神宮尊号後

陽成院の御宸翰をうつし給 先年室鳩巣直清貝原篤信伊勢長韶谷重遠たて共じ此人

附言 大坂神学者桂秀成此文庫に講説せし時 継来の日記を宮川日記と云 神談後の書を宮崎の数

雑談に云く此文庫の其人中の華を撰ぶ 学者の人は書籍一覧のため家に来て今国に開講談にとぞ

屋上 按るに文庫落成の時度會延佳の座上に一の菖蒲を生ぜしを延佳此より卯して號とし子孫と 好文木の隣より今より二百年の余経ても猶文庫造立の基 藤なれハ天其名を愛せて祝ハこ 勢陽雑記

度會大國玉比賣神社 在尾崎にあり 祭神大國玉命俍く良比賣命二座

外宮摂社十六座の内之 此所を大国玉谷と云 大国の誤なるらん

伊加利社 大国玉比賣社の南にあり 祭神末社の部に記す 儀式帳に名社八所の内とあり

井谷池 梶ヶ森の西にあり 井谷又宮谷とも云 保安の頃ハ往来の旅人日影を清しの霊水として 今ハ池の中に鏡石とて 山田の社の旧地とはいへどもカチハ海内の豪族の跡なり

梶森 神祇本源に沼田口の社ハ 此森のうちにありといへり 宮崎の流より西にありといへり

豊宮崎の流を渡し西にある倉山南に彼が岳を渡ふて

神楽

錦河内 岩が淵とも宮川のみなもと也 源は鼓が岳より出る 会所より落合て勢田川 小田橋より上なるをいふ 又みやきの小川とも

御田 岩戸山の北にあり 是を宮川の御田といふ 又は抜穂の御田とも 精進田ともいふ 元長一の宗語記に 御饌料神田あり 其名を天の長田といひて 天上の神田なり

・植ところなり 又は御常供殿ともいふ 豊受大神の御田也 尚図上に記せし

宗谷山 御田の府 椎の木一本を切 小屋に造りけるに 抄ひて十負の祢宜これを為

山末 井 足への南東 和末谷にあり 此社の名を 俗には根ありの松といふ

麻留山 御裳濯川の南にあり その形 末社の末にあり 御裳濯車に似たれば車塚といふ

○田上大水社 祭神末社の本によれば 田上の社度会氏の祖大神主小事命 大水社は其の女神

ある人のいはく 宮守する人昆の女なるが 欽明天皇の御宇 度会の神主の家にて 祢宜のまへしく人ありけり 旧し

御垣の間に二社あり 申し後の権の石殿は 列官子の墓之号の社として 小祠あり 宮守ば御あり 本たなり

宮滝の氏社 九山西東二町計 氏神村に有 祭神 度会氏門祖 天村雲命 之此社の前に小祠六社

あり 度会氏の祖をまつりたるなるべし 延賢神主日 天村雲命よりは 天日別命にて 伊勢津彦命を退け 当国創

業の神なりとなり ○忝云 遠祖天村雲命は上御井社 天日別命は此氏社 彦国見賀須命

国見社 大若子命 乙若子命は大間国生社 小事命は田上水上社にて 度会の祖神なり

世義寺 教王山宝金剛院神宮寺 世義寺は別号之山伏寺 真言宗 塔頭十九坊 旧は前山亀の谷といふ

所にありしを 永禄六年外宮の西に引移し 寛文十年今の地に移せり

開基 若干となる 薬師如来 今も例歳九月廿五日より卅日の間 如法経とて

書写勤行あり 是は古 嵯峨天皇の御願によりて 大神宮法楽に修せられし例とぞ 寺の中興は前海といふ僧なりとぞ 年月も定かならず 旧記もなく 諸人輪番に勤む

○ どうび 世義寺如法経会修行の日 暁天に彼書写せし経紙山田基地前へ納むる 其の落次神興の如きものを弁事は 敷をもて 其形をちいさきを 大師に始り

るといふ 散楽 散花は前の送法にて 此経を書写する料に 後徒 衛事を照せしに 末の衣をとれ 其水は 立ちの汲む紙用ひて 紙を洗ひ 薬を料紙用也 蔵室の式に 後徒 井なる慶をとえて 其形 薬を釈は 三筋よくく継合せ 尾は井 切あめなる緒にたけり ○ どうびの名目 古今解せし 式筒 去被をなして 汲音 どんひい といふより 号くるなるべしとも 伝ふかくし ○ 此寺桜されて とき 盥二つ搦出せり 一つは長寛元年 一つは治承二年とあり 寺の什物にして 今にあり 此法会

の日 手に取く 道外ともりまの書写にあるなり

瀧浪山 世義寺の北にあり 林藻に橋あり 激浪の橋といふ

新古今集 激浪のひとしき 麻の音に寝覚さびしき 園本のさと 荒木田成言

○白子園 世義寺の門前をいふ 古名にて 園本に属せり 寺院五十六宇あり 瀧浪の橋の東に八幡山 弁才山

永代山 虎ヶ尾山ありて 尾上経が峯より連りたる山中 傘松といふあり

図守里 此町東は小田橋 西は高倉山なり 先年御奉行所より 岩戸坂を切ひらかしめて 外宮一の

鳥居より内宮往来の本道となせるは 寛永十七年九月のことなり 前は

一の鳥居より小坂を下馬の橋までより 岩淵に出て 園本まで途に出る

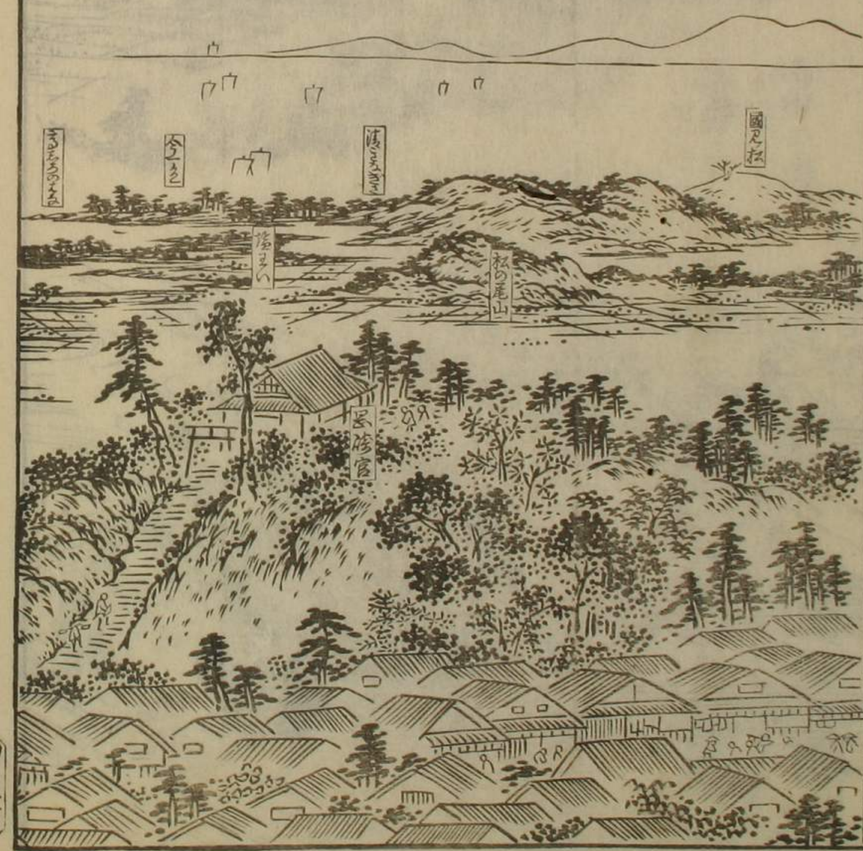
つるみが嶽
八幡山
世良寺
若乃宮
御贄川
小田の橋
柳見町

宮山
この辺
此辺の
慶
慶
園と
丸山
山王社
慶安民社
神小川
器平町

妙見山

附 白丸の車

[illegible]宮古記に曰貞観二年大内八高至度命氏の勢栄を此国[illegible]の社に祈られしに又内十一月十又日内臣二人の男子を産む宗雄を雄と号く内三年十一月十八日又内二人を産春海枝を枝と号く内四年十月十又日又[illegible]を綿春[illegible]と此六子を六家と[illegible]と交りて今小牡の素社白丸を[illegible]と称をへたりとつ

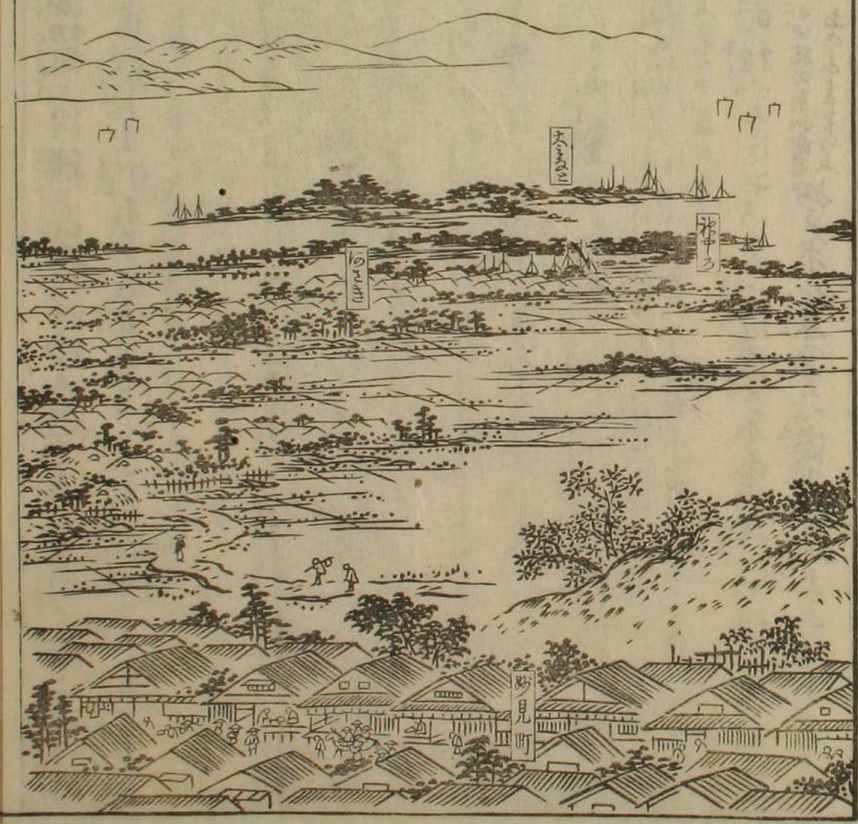


此ヶ白丸氏啓蒙

[illegible]と

[illegible]の記の裏面

[illegible]の[illegible]



其切開きて石を堀切所と山の腰とふ○此地を造る櫛を園女櫛とふ樗
いく俣まてたる非宮（就ぞる例あり 故実みるべしと
○按るに此もの〳〵しき事より用ひん神代も湯津の爪ぐしとふ此もの爪くしなり
（形くのおもゝ注深夜振形の窓とふべき事より其なりと云
の形とかはるべし）

園女の里い外山ちかれい宮訓みなりさわしきの名

恭本曲 威忠

継橋 園女森あり一名地蔵橋ともいふ 和名抄又継橋ともあり古記名

古書に佐〻良姫命と大国玉命ゐを継で
橋とせしより此号あるとふ池蔵橋とふるい勅使の御叙爵式狂業記此橋
まで見送る 狂業と地蔵数詠をとかれ法師ともあんまとかれのそしを測後橋とふ市中より水辺の
号あるもまことなり

外宮一の名居より園女町の入口を中ほどふ其中途に此継橋あり西宮
属しかい園女に属せり○按ふるのこしと協切ざる茶い勅使此橋と通ずみべきに非ざれば祝義
の橋の名も受べし

小田橋 是かと妙見町 此川を御贄川とふ〻〻流して川筋松江と経てる城溪
清き渚ふる其間を勢田川とふ 此橋の左りの欄杆のかゝりて茶あり芝を
刈の月絵をと俤ふ〻〻ふまよう名付ふる 茶橋とふ探人の通て橋なり勢見の国俗女

河遥里 小田橋より三所経小をとして尤川辺の里今の川筋にて此石ふいあるべ

妙見町 旧名須賀岳 小田橋の東の町〻妙見寺棒の里に尚下の尾上山の条ゐるべ

園傍宮 妙見町左のふくまり 妙見菩薩北辰尊星の像紙安置せり長八尺いとり
今ふる妙見まとふ〻〻
秀髪ゆて面容童女のおもく左りの二指を変ふ指ざ〻右ふ剣持給へり
素木彫りゆて甚古拙なりしを彩色をそ〻〻信と多ふ似ゆ
首に忌傍の宮とふ社地之山 社地り尤舎氏の胞衣を代く納ゆ〻〻ふ社地ふ胞衣と祖る
ふ石塔の中ゆあれぐるに上代の板宮ふ〻〻
一説に此首外宮より内宮へ神饌運の時尾上川をそる名ゆ溺死せ〻ふ其魂をおもれども
して此妙見の傍紙得ゆり即見の裏ふ妙見星と刻ゆり其舟ゆり変ふ祀ゆて小児の疱ふ
乳の祈ひをくまふ〻〻ふ〻〻

尾部社 御ゆとゆり左り妙見 祭神未詳とふ〻〻も倭姫の命ふ必せり 神祇本源ふる
ふ〻〻泉寺絵くまれど武流ゆ泉寺ふ寺の一名なりもふ 泉寺の西ふ
即命石源ふ地ゆ小河紙ふ尾部の社とふ尚尾上山の条に見るべ
我脊ふゆかれの園のふるこ（雑子）かりもあるそ身の経紙ば 伸正

隠山 此山の西の町の末妙見町と尾上坂との間の小のふなるべ〻た記ふ奥観身中妙見星の像
世記云雄男岩五百三十三年の春二月 倭姫命自尾上山の墓ふ退さて石源まを
友尾上山紙源ふ山とふ云 ○方素 持統天皇伊勢ふ行幸のとき郊ふ〻〻ゆ〻〻尚麻
我せこうつち彩らんかりの源ふ紙今日ふゆ〻〻

隱池 尾部坂より東でいきのよこ
あり俗不動池とも弘法勝刻の不動あり旱魃の時此不動祈れば雨ふるとかや
桑萍よかくまの池の埋水なくべからず月ぞとゝまる

尾上山 右名隠岡とゝ云い倭姫命薨去の地なれば之墓集及び代々の撰集又詠歌多し 寛文年中尾上社として倭姫命社再建なり

しかるに彼都今い誰建ゝ社なもなく社なせり墓地なり」ゆや寛文の比
云いまゝ山の上の方に引出し罵辱しめ退放し或い谷へ投落せし今又山石祇地獄谷
者あるはは此の引出し罵辱しめ退放し或い谷へ投落せし今又山石祇地獄谷
とゝいさんと云い上方のゆゝ山ふのゆめの池とゝ云石祇地獄谷
場なりしゆゑ又地名へうつし其外山田上市中又接し教多の寺院或い外宮の境内
を後し位る人多祇も當代地を改へ引移ゝ又地獄谷の名い黄一寺ありて十石おち潜せ
らるゝ 五十石谷などゝいふとの説もあり

常明寺 高野山法示院とゝ ○ろのあり 歯不爭三の大寺之中る薬師ゝて天台宗額い後

陽成院御宸翰中世弟山門ホ魏くゝう登徳寺みの建立ともつゝ
○按るゝ仏地尾部陵の南ゝ方南部遠くいゝう尾上寺又泉寺又天福寺なとゝひ
し仏寺のゝゝん尾部坂ゝあるゝ尾上寺とゝ 衆寺の名あり
其後奏せしゝと再興しゝく天福寺とゝひしゝ毋の法みありしゝゝ
建せしゝう尾明寺とゝふゝり 天福寺中再興の後今い接垣家常明再

○祇萱落社 尾明寺境内ゝあり 祭祇 神野姫命 祇祇牟源ゝい尾上寺の名ゝみ

とゝ祭祇 ○正月八日 十二月八日 毎度之外宮の末社ゝる西ゝ度會祇を祇樂男た勅之
其式異例之其日長官方ゝ住僧ゝ貂二候を送り又男女陰形の餅を苛
ゝり母俗ゝゝゝき者ゝを拾ひ男ゝ女ゝを浮るのゝゝとゝ仏ゝ絶り
く住僧牟ゝ出て誦經あり始絶祇人ゝ衰對ゝ不及暫對座るのゝた
て又祇樂あり ○岩窟 ゝを倭姫命の石窟とゝひく仏寺の山門の西のかゝ
ともゝ石窟の地とゝつり 歌ハ如見所正徑隍の内の石窟なりゝもひゝ又天福寺ゝ九嶺こさ
巖上石つゝこの宮あり此辺経堂もゝの西仏きゝ
ゝ若ゝなどゝゝゝゝもゝてこゝぶりにつゝも元宮ゝに ○阿闍梨ゝ庫裏の東竹林の内に
此辺り地名祇ゝて所ゝ梨ゝゝゝ泉寺とゝ名あり
頼政碑 末ゝの者の ○眠地藏 右市の東ゝ女ゝ眠の祇をゝる ○石影目 日蓮弘法のゝ女宮ゝ百日祇
爭法絶ゝり今の繁 芸ゝ出ゝ明寺の藪の遠りゝあり 鏡目とゝ美ゝり
祇敷山光明寺 出明寺の小西田とゝ不ゝ 苛祇とゝ不とゝて天台宗なり
聖武天皇建立ゝく開基未詳 ゝゝ川筋ゝ出明寺境内の神宮院
流ゝ月波和尚ゝ繪城 史料ゝあり月波和尚當寺住職の時ゝ神宮院
上ゝ繪ゝ入ゝ道忠のゝゝ ○結城上野入ゝ道忠墓 ゝゝの小島中納言藤原ゝゝ屬ゝゝ奥
延元ゝ年ゝ奥及ゝ

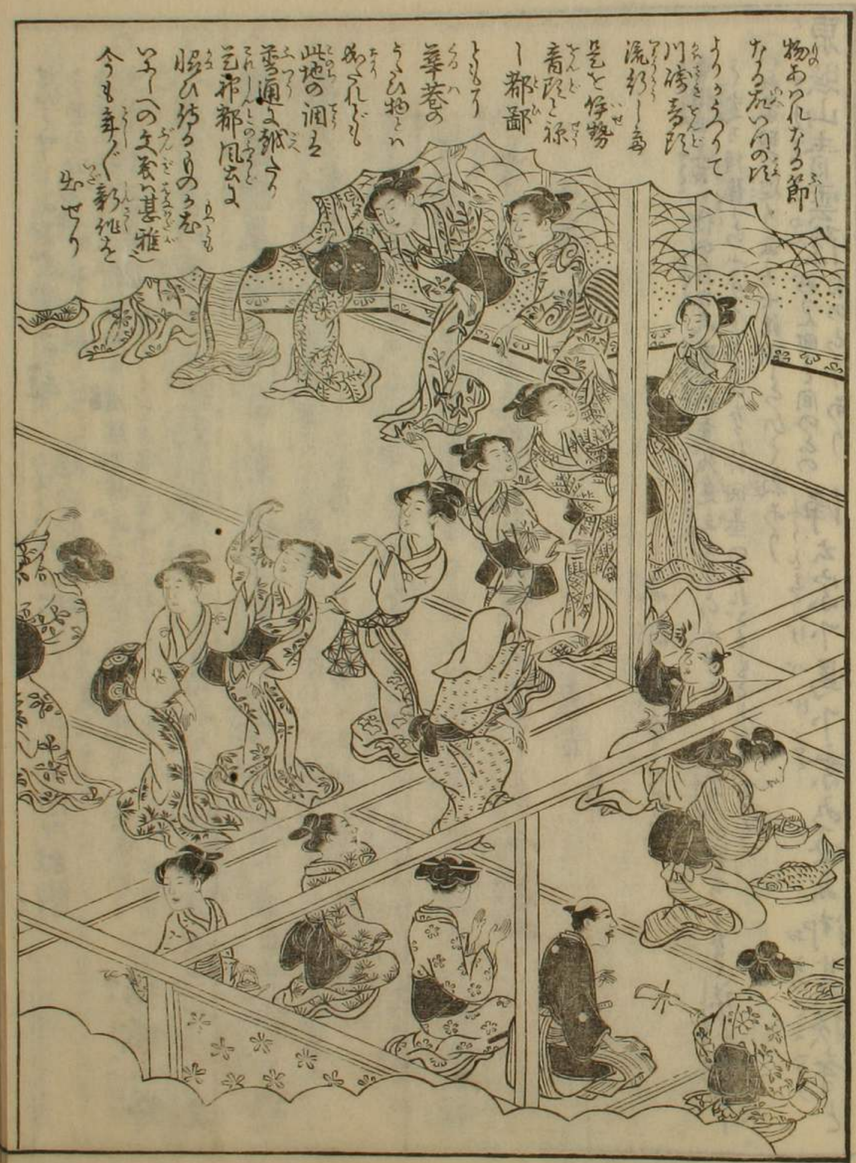
常明院
本堂天井又吉田兼好の
樂書あり
出生死沙入涅槃
專念旨趣大樂大
財常能堅固
吉田真禪山下
野僧一七日參籠
石の宮
石の井

稲荷
古社
天くるひろ石

間の山
両宮の弓の弦
なれば間のふと
いふ者今も浄
るり名ゑかへ
語る物ゑ弓七山
ゝゑ言節い元
此和ゑり出る廻
灰ゑ人ゝさら式ゑり
三ゝせんひくるゑ物り
ゑれゝも遥ゑい
ゑせゝ仏を
ゑゑゑゑゑ
組べゝ

古市

昔の市場へ人り法國
三日市四日市八日市
なとゝいひて其日とき
やく市をうせ一名の
はり〳〵うる市ハ近國
を郷の商人の集る
所なれハ其市と
さゝ不必花女ありて
旅人の愛と顧を
是淫亂乱之
又用ル
扨此古市も間の
ムの内ふく新宗
さゝひ一おく
間のゝ節と
うゝひしもの
なるべし



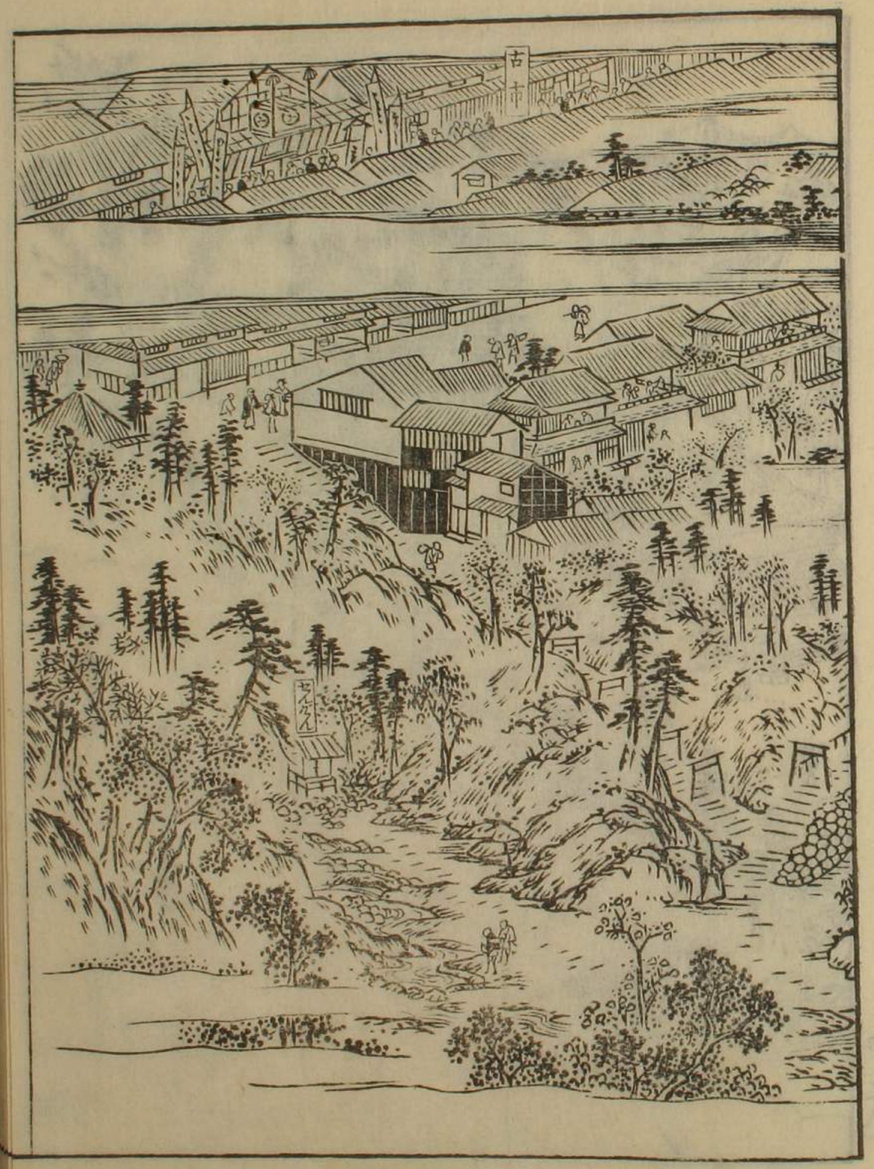
せんとせしに安濃津にて癒
くやまと国吹上所〻〻年を○後白河院碑これ一代の仮御所悲嘆の
○北畠顕家卿碑此卿も津国安部郡に戦死を今に懐かし結城家より建しとぞ名山田吹上にあり〻〻に百年来のものなり○結城上野
入道自筆の軍中日記勅制軍法なる書あり参考考古学記このせられし光明寺残篇にも〻〻ハけ書なり
○鐘 後深草帝の御宇常盤安実氏入道寄附之毎日酉刻つき刻こ
撞之 天正年中外宮神宮方より祈願の古法なれば撞べしと下知を僧等
秀吉公へ御ふやうにと上訴就中寺〻より文書今什物とせり其文曰
書中遂披見云〻田撞之後古祈宮編〻自昔参詣申伊
汐先撞一つをみつくに朱みくく云分仕こと出来る月乞て申先云
○如中ことるべさよあらばの○て借後を祝を〻〻て文者や
秀吉
朱印

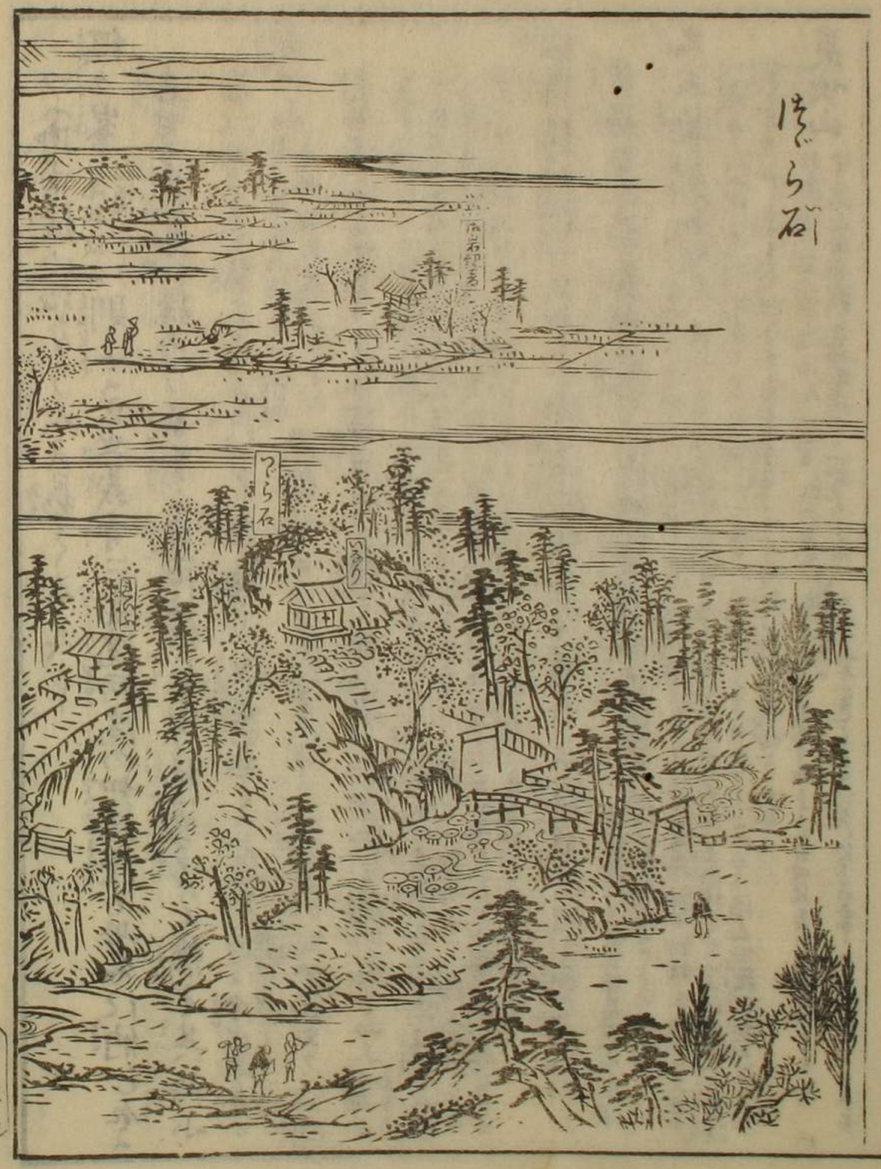
十月八日

上部城中ち反

寺僧云上古い伝の自力入庚人の奇絶建立ちとるとゝ仏寺ちの別ちもく法宗恵学〻
〻定る復職とゝふるなれば開基のたんごるもことりちり
○此茶田の遠りふち七清水とゝひく〻教あり
東照山青雲院妙見所と同のゝのゝ浄土宗下馬下条み世み御裏換寺と
南のゝ〻あり

つゝ御国備の地なり人ふ見多くちるべ〻
經ケ峯尾部坂右の頂なり則上ふ云世義寺三宝院両院の如法経と此石に納む乞ふ
名付ろ〻松樹一株あり南尾ふ曼陀羅石あり梵字多く彫り其侍小
石にあるまで皆苔むり苔むり希雅〻近世の地しるべ一説ふ金剛脂義の曼陀羅〻もつ
間の山妙見所東の坂なり四名尾部坂又尾上〻も云尾部のみいとにふくさり西宮の間のゝなれば間
けるゝふゝふ乞ようり東古市所と挟み牛谷ゝふ石も間のゝゝふ
つゝくゝつゝ乞乞猪の娘三〻せんをひき残を乞ふ行人の衣をさりて洗さん御
さんるゝいつゝくるゝもい粉ゝゝ拭て拭るさてゝいゝい筆人の拭後ゝく物人のゝ〻其の
人をつゆめそ云そ古神宮ふ中絶の馬ゝ分ゝろ繩のゝ縁ゝる
ゆゝう 繩人ゝふる俳ゝのなり尾上坂の山田吹田村ゝ出ゝ年谷坂ゝ宮治絶谷村ゝ出
古市場尾部坂の東の町 乞ようり宇治絶昔の市場ゝて繁昌の地ゝ茶屋多〻
芝居み平和国と絶せら国祝代宮絶居国と絶之 保元物語ゝ古市伊勢武者ゝ系図
大五論 古市ふあり〻石方に天堀ようり頃〻ゝ余微説明ちるゝ此系武布絶ゝの坂ゝ云今いゝ世戸
布絶ゝ布絶ゝい捕部の古名ゝ此辺ふ京寺ゝ〻ゆ〻ゝ和泉武邦ゝ石塔ゝもいふふ真言芝薩
の建立ゝふ武い光明皇后のゝゝ乞ゝ西ふ京の四家ようり七月竹鈴をゝ〻ゝ宇治ゝ田戦ゝ死せ〻
霊をまろ〻ゝ乞武説ふ西ふ京の四家ようり七月竹鈴をゝ〻ゝ宇治ゝ田戦ゝ死せ〻
貝吹山 松尾山の安〻びの九ゝ布絶ゝ宇治ゝ田会戦ゝ貝を吹〻一至りゝ云 ○武云天和ゝ月名あり桜ゝ土古説伝ちる貝を吹〻一不義〻三


古市


ぢらぢ石
つらぢ石

芭蕉塚
かや堂
本堂
かや堂
花りの井さへ芭蕉塚あり
こゝ成
山でゝ結
こゝろ
つげ
よ
ところ塚

菩提山
神宮寺
坂士佛未詳記云 朔徳巡礼の志ありて
ひつゝれる紙下る程よ祠官の邪を
なゝくゝ紙徒居都ちゝく張やうよ
民廬の垣かつゝ紙家居の見る冬の
鄙よい仏を香炉風蓋 弘仁寺
浄場茶竈烟幽菩提山禅坊
かゝ紙寺ゝを一見してとゝ云 下畧
山家集別本 行勢ふゝく菩提山上人月ゝ到しを
述懐せゝる
めぐりあいく雲井のよそにかりぬゝも
月ゝ見れ紙くむつひまをしれ
西行
方丈

中地蔵 古市の次の町なり 廿間長峯といふ内宮か外宮まで五十町の其中間廿五町目也

左に中の地蔵といふ堂前に長命水と云井あり

葛籠石 中地蔵町东の方二町計にあり 此ところも長峯といふ たかさ八尺余横二丈斗石重りてつゞら形に似たり今は注連を引て小社とし此傍に観音堂あり是を大岩の観音といふ昔は桜多く咲て騒客遊宴の地とす

王孫池 古市より朝熊へのみちにあらせとが坂をおりて此东にある池を柏んぞが池又おわりだが池と云名は大楠の池なりとぞ昔大なる楠ありしが延宝年中の旱魃に倒るゝ又王孫が池の名は下中村皇女の森へちかきゆゑなりといふ ○赤子池 所在未詳

月讀伊奘諾両宮旧地 布施戸坂を下りて右の方森二ケ所あり 仁寿二年八月廿二日洪水に二宮とも流出て左今の中村の地に移せり遷宮の年月はさだかならねども延喜式に載る所は今の地なり 上古は五十鈴川此辺へ流出东小の楼瀬鹿海村さかの淵へおちて二見浦へ流出てそれより布施戸坂辺まで洪水により水溢出て

菩提山 神宮寺 真言宗なり 下中村にあり 一面の川をへだて楠部川は中古ありて五十鈴川筋なり 聖武帝勅願によりて天平十六年の草創開基行基菩薩文治元年良仁上人これを中興をし遂に西行家集に菩提山上人によみてそ今ある所は此上人なり 建久三年正月十九日入寂九十七歳

なるまでは阿弥陀佛 行基作 ○両脇立 不動毘沙門 ○鎮守 両家童子天満宮 ○二王門 二王は弘法大師作 古は大伽藍の地なりしく金堂大師堂多宝塔経蔵などは弘長年中大火に焼失して其後宝暦十年朝熊岳尊隆阿闍梨これを再建して弟子隆範に附属す ○丈六佛像 続日本紀廿七云称徳天皇天平神護二年秋七月伊勢大神宮寺に丈六佛像を造るとあるは則此寺是也 日本紀略の神宮寺なり ○舎利 聖武天皇舎利を神宮に納めらる 是は神宮雑記に見えて今此寺にあり ○萱堂 阿弥陀院 良仁上人退隠の地なり文禄元年なる碑に阿闍梨の名号を刻める石ありけるを ○船板 名号 弘法大師入唐前に此寺の本尊をうけて後世に船板に刻みて納めし類は兼和元年三月十五日空海出之とあり

曼陀羅石 大同二年空海刻之とあり 奥の谷にあり

幅三尺長五尺計

曼陀羅の古瓦 甚多し両面に雑む其内心経を細字に刻せるは圖の如し年月定かならず

四寸四方 竪の上下は缺破せり

諸佛依般若波羅密多故
是大神咒是大明咒是無
般若波羅蜜多咒即説咒
諦波羅僧羯諦菩提
訶般若心經一巻
四書寫之御所近邊
承安四年 月六日

承安四年は八十代高倉院の御宇なり御所とは神宮のことなり

皇女森 五十鈴川の下中村にある森をもいふ 西の方にある 楠部村 日本紀雄略帝第二皇女栲幡皇女

月讀伊弉諾社

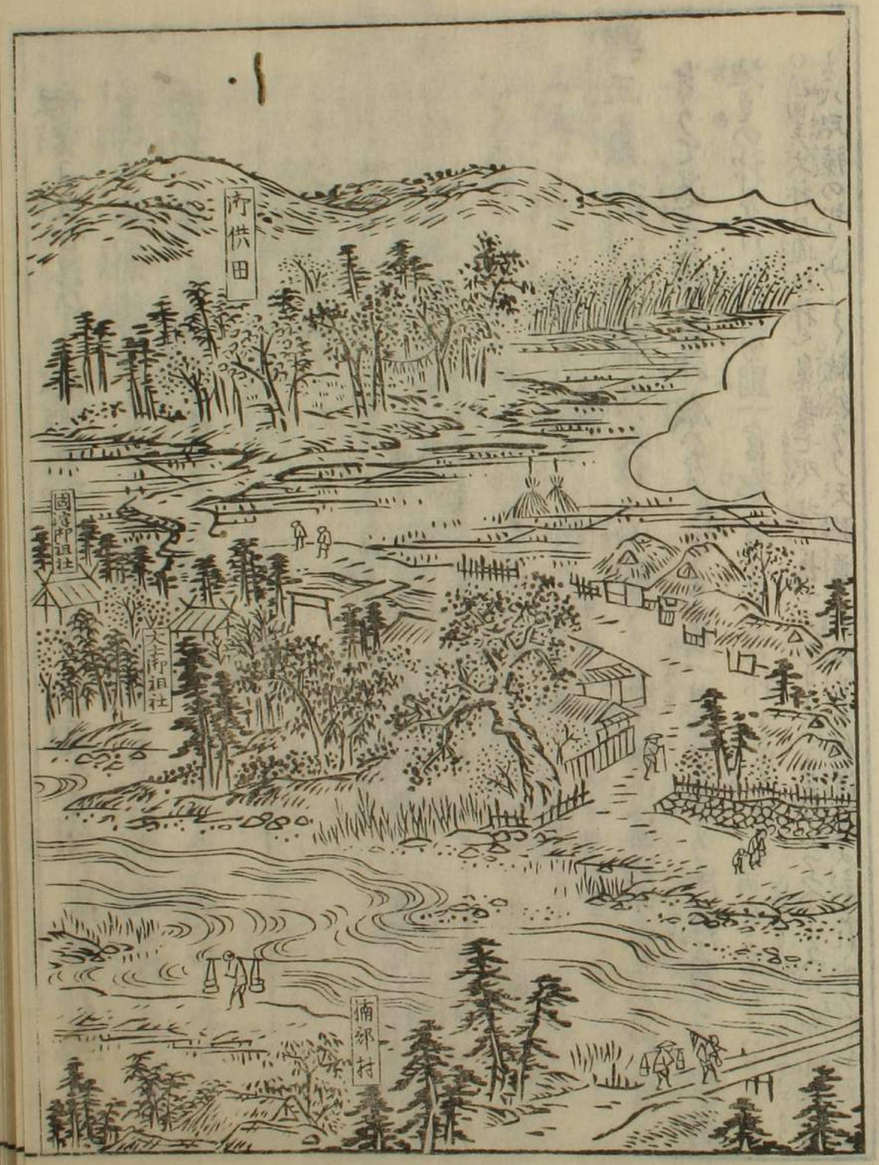
文安年百首　實清朝臣

いさるこそ
まもりこしの
後あり
うこ
ろ
ろ
多
ちぢ
ちぢ
月よこ

仝　九条内大臣

なまはさふ月日
くもぢ
ぶさ
の
こ
ろ
ろ
ぶ
ぶ
よはあ
ぶ
ぶ
ぶ
ぶ
ぶ

興玉社い名あり名猪岡
老あり くこれ伊勢國の
地主之世俗又伊勢や
日向の物くつり ちすす
ち此神傳の時ど
ちうめうべし
其式ハ文上あり



楠部村

大土御祖社

國津御祖社

御常供田

文月吉日を吉らん大御田の祢ぎのあり長官の
氣司のたまゑ政所のたまこれぬあげりゑ御先しゝ云
祭級人山向内人苗を植ゆそよりくゝお副て植終が
皆長官の氣に紛くゝ三尺斗なる御田扇分植て
左右十人斗長官植りたちたゝ植てゆぐり紛
ゑ笛つゞゝ長殿そうゝ以たゝを其ゝ方 おゝえドウヒイ
えゝゝゝやゝゝ こうゝゝなりゝさてゝ長官の氣に紛
長にて田分ゝるまひあり老い女ゝかくて備級人
ゑ酒をなまへこれを御供川あゝく吸ゝ
後ゝい水とりけ合
後ゝ扇分
やぶ記

秋宮より立せ給ひしが盧城部武彦といふ人と密通して終に誅し給ひ阿閉の
臣國男人らの者讒奏し給ひ皇女帝の逆鱗と成て御饒を抱きて山森より
播磨に移り給ふ帝其御屍をもとめ給ふ腹中を割て見給ふに氷の如き物ありこれ
世に珍して叡慮の疑ひ解く後臣成誅せらるる元金く神饒の御德と
もぞ此所其古跡と云

月讀森中村より北宮より八町斗北之延喜式に之神宮
伊勢諸伊勢冊尊宮社月讀の宮地の西にあり内宮に別宮の内にて宮居なり此二神は御姉妹
にて天神七代の末人體乾化の神と大八洲國山川草木を生給ひて天下
の主なる大日霊貴天照大神を生給ふ又月讀命は生給ひし御父母なり

興玉森月讀の宮にあり猿田彦大神の旧地なり五十鈴の宮地を皇太神宮より
なりて退き給ふ猿田彦殿は大神の御殿なりしてあ居一基を立て御祭殿より以前の
地主の神なれば伊勢國一宮都波岐大明神と崇る 両宮より北に一日市の一宮
○猿田彦大神の道祖神と顕はれ給ふ 鼻長七咫背長七尺あまり正面に向ふ眼明輝眼
八咫鏡の如くにして天孫尊且降給ふ道路を導き給ふ

女命其御腕を肩の下より抜き給ふ 嘆く雖やと同じ 襲者を腕の下より抜き給ふ 嘆く雖やと同じ
當り給ふ 郷と云 迎へ奉りて御結び給ふ 對日天孫
皇孫河内國に到り給ふ 對日皇孫に挽紫日向高千穂櫛の峯に到り給ふ
吾は伊勢國の狭長田五十鈴川上に到る 皇孫日神の宮所を守護し人皇十代垂仁天皇の御
○按るに大田命は此神の裔なり受伝へ
宇佐姫命と道すがらして宮所を五十鈴川より導き給ふ元皆猿田彦の神德と今備社の
○椿淵 此辺にあり 元以対て怪沈の俗説多し 然も真玉歩の弓を以て椿大明神の故事なり

楠部村 旧名尾崎の里古市の北を里 ○大土御祖の社式内不祭大國玉命 水佐良良
姫命 二座 元を不足社と云 清水森 麻海村
○國津御祖社 大土御祖社の内良あり 宇治比賣命 村田比賣命 二座と両社とも内宮
摂社二十に座の内にて村の左の方森の内也 此森紙泉水の西にあり 麻海村にあり 森の巽
御巫供田あり毎年又月に大御田祭り御田植 國津御祖社と八國の祖と内宮の
○村田にある田の神なり 姫の神なり 宇治姫命

牛谷 ○の地蔵の東の坂なり牛谷坂 浦田町へ入る 東に門あり此門を抜ける
浦田 牛谷の坂より北に入る町なり ○中之切 浦田の次の町にて宇治の乞食谷田
伊勢上人 中の切右の方あり 芸光院と号也 猿家の石寺と世に上人の住まとして伊勢上人と
園田の二さと其名の名紙中之切と云

西行谷 神照寺

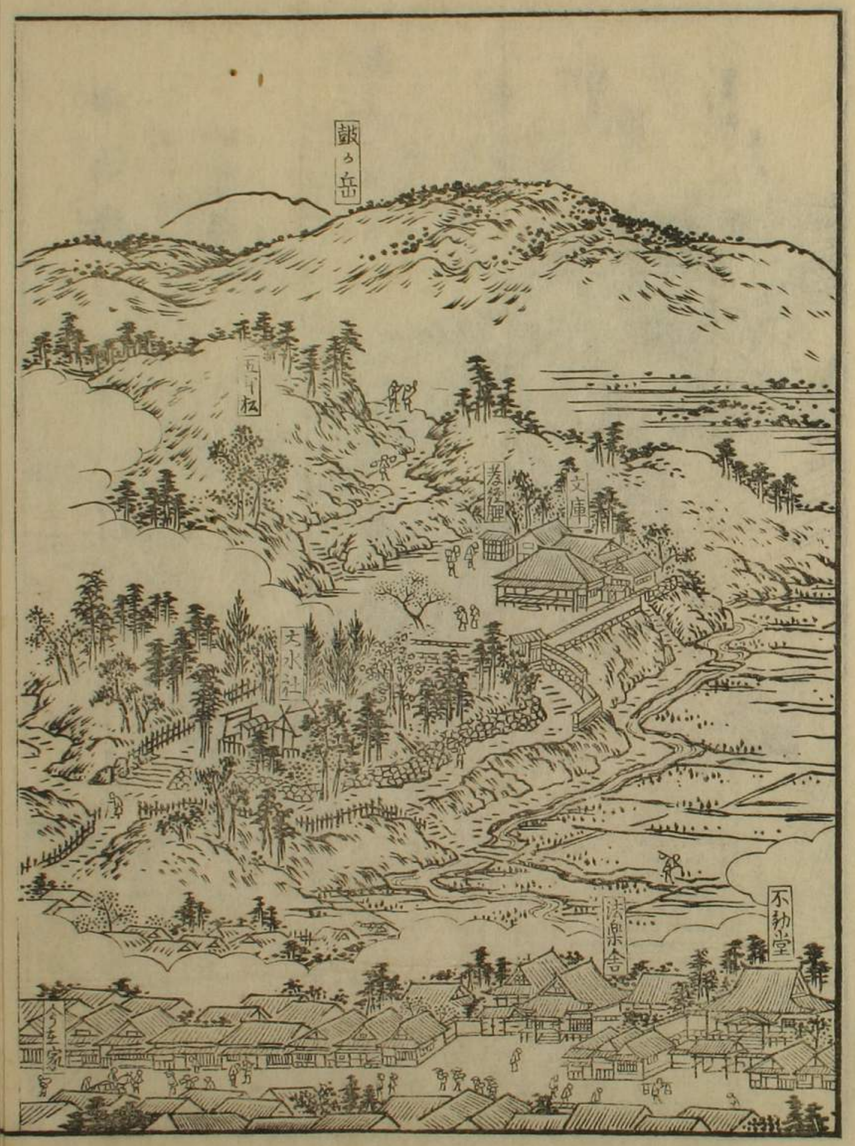
西行物語ニ云西行
一夜園伝法院ヲ出
流の御所小面召
老ヒ尼一尼参対
憲法ヒトヒ参ル
門前の人々法の話
ヒ聞シて西ヒに往
間もなく大神宮ヨ
詣で泳ぎ参り給ふ
神ハ二見の浦ヨ座をむすび給ひ
さや二見の浦の月をそ眺給ふ
彼ノ人々ニハ 神宮ヒ仏縁ハ貴賤の上
ても隔ナク人間ハ同ジ三身平等ノ
実ノ方ヘ帰ヒ給ヒ 西ヒ双林寺
の辺ヨ建久九年二月十五日ニ寂ヒ給ヒ
ヒ 御年ハ七十三ノ時ニ成給ヒ
それ法師ハ世ノ中ヒ月ノ後

俗傳云西行の妻ハ
遁て此庵ヨ来ヒ
うちに我像を造り給ひ
香花として跪ヒ法を妻ハ
宮ヨ髪と称して終り
往果て今ハ尼僧と成へ
神照寺とつり像ハ弥陀仏
とついて後ハ尼の像と
副て安置ヒ

かくハ語りつたへしも西行
物語ヨ見れハ妻ハむもと
とるもよろこぶ雅天雅ヨ尼
とかくて往生をとゞ
うり娘も出法元年八月
日不ハ終りるとそ
即それ法今うう
法もろ

称し七寺号を称せどえい山田西川原所よりて天正年中焼亡
の寺院と遠ひ佛堂殿祇の教なく禅なれども本寺何流と云
なく正み僧侶を経て紫衣を賜て官寺の息女代々住職し法人開山
○大功名誉の不道器宝 庫中に袈裟殿堂古代の器あり 狩野永徳二十代者の筆あり
園田 中のきれの元の方より橋あり彩橋と云 ○那自賣社 園田の左りの方にありて
橋のなるこの所を川東所と云 弁才天社 寺の西
園田山神宮寺 山法の所東の建久の比関伝上人皆寓居あり 正之又西行
西行谷神照寺 山法の所東の建久の比関伝上人皆寓居あり 正之又西行
自然弥陀造り 西行谷の扁額の慶法の志今に文人詩歌集舎の
席と云 今の宮殿為九大純之老廣人の御宮殿
○谷戸松門前にあり法人勢観ぜ行者を尚西上と云を
谷の戸より獨りで松い三祀なり我のこと友いなり紀とと云
○餓鬼谷眞淨院 前藤まあり此初代文蛭と云僧密法より妻しく奇異の法へあり
流と云密法を此寺に伝へしとぞ 禅尼帰依し茨安寺中山寺以建久世之絶る地蔵院
法楽舎 園田山神の右の方より後宮多院勅願して建治元年百年の今より
三ヶ佛ヶ寺と言ふなり 建治三年丙三月異国より蒙襲るの時法仏のこと

建立ありしと云今も僧法師系清の時法統を継ぎ
不動堂 ありて明王院と云ふ其不動明王 庫裡宮殿は天正十六年豊臣秀吉公
蒲生飛弾守氏郷の命にて造らしむ上祀祭中る善法寺紀不動ると初ると云
法楽舎の右佛なりと云
津長社 細村の西山の傍にあり不祭二座 ○大水社 津長社の南に不祭二座大山祇神迦命則
摘長宮 命にもて大の上の児 山の神と右内宮摂社北四座内
鼓岳大橋の西より久く宮川又十丈川三つの川に接して
の堂あり後てでこうたけと後佛に称を
鼓岳山蓮基寺 長明
此寺は蓮基寺の右地にて又十丈川の西より鎌の宮と姿びより鎌の宮は宮殿の南に位
宮殿と云田紀名の掘られば三坪塚と云あり 後右の宮川の浜に切れ余町川上佐八村に
ありて寺は蓮基寺田寛往来せ一名の山数岳を称ると云もの其法は宮のまえ
なる西へ移りて四ヶ所祭りし勅祭せよう武家掃除せと寛永十六年えの古く神祭な
えへ一とのの公命みそ宮へ後せり
鼓岳山蓮基寺 蓮基寺村又一条院の御宮永歌三位の建立古く法言宗也
合の慶一て祭りの小寺に勅書を安置せり青い紀又所奥にあり と又十終川と宮
門と左右に流を中に堂ありと云其寺のくの古る沼に妻一く出て抄入て
八百年ほう及て
神鼓山長明寺 鼓岳と林橋との間 本尊二体観音勝長明 皆く此不動と位と
林橋文庫 鼓岳の東の尾橋 大橋西の尾 真言宗に年に遊立ありて公ようと兼倉を治ひ志ある
岩樹合して造立せる神い林橋が南の方九ヶ所に立ちり 元禄三年 此不へりて紀


皷ヶ岳
文庫
文水社
法楽舎
不動堂

菱光院
不動堂
法楽舎
文水社
津長社
林崎文庫
書籍法家の寄附若干を納む後の石碑あり是後一部を獲む東武源鱗の書こ石に刻して奥の石碑を建てり
津長社
弁天
菱光院
中の坊

宇治橋

五十鈴川

御裳濯川

君が代は久しかるべし

五十鈴の川の流れ絶せず

前中納言 三房

きみが代は

尽しなき

五神風や

御裳濯川乃

つゝん

民部卿経房

鏡石

宇治橋より十八丁斗 其間名景多し故文又委し

国とゞろかして一毛も動かず其外奇磯遠近にあまり数の群集に異なる。此瀬々の清泉の緑深く奇岩として飛瀑を落甚だ自ら松柏う荒して溪谷の幽邃もならん蒔薔羅風にみて姑射の山へ入るがごとし

此山の路をかゝる鏡が淵・蕉淵・西行庚旋にさゞれ石あり又宇治橋より川沿及六所よりて石の山路に

いくれば龍が尻切索が尻るどと號て志りの村邑あり此辺御贄の漁人あり

橋姫社　宇治橋の東に橋を守護し給ふ神なり

宇治橋　宇治の川あれば所々に架す　川は五十鈴川也　番通の橋より五の内に長さ六十五間廣さ四間の橋なり武内

宇治橋　宇治の川あれば所々に架す　川は五十鈴川也　番通の橋より五の内に長さ六十五間廣さ四間の橋なり武内

長さ二十六間　俗よりよる者なり　常彰神を曰つて

一流は宇治より下の谷に志及び殘部村の辺の谷に来る

の海に出る　今重より流るる　イスゴとも云義は未詳　五十の終と接続し　との説は明白なり

鏡石　水上にあり　清浄明白誠に磨けける鏡のごとし　高サ弐丈横五丈斗の大石なり　谷川の方より西面を見れば

て二社あり　社の内に今未往四つの鏡石の色黑石なり　上略　谷の水

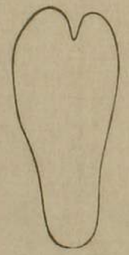
いるなり　老人の説きに　みもとを川の川上は大石巖そびへ其中と流れ

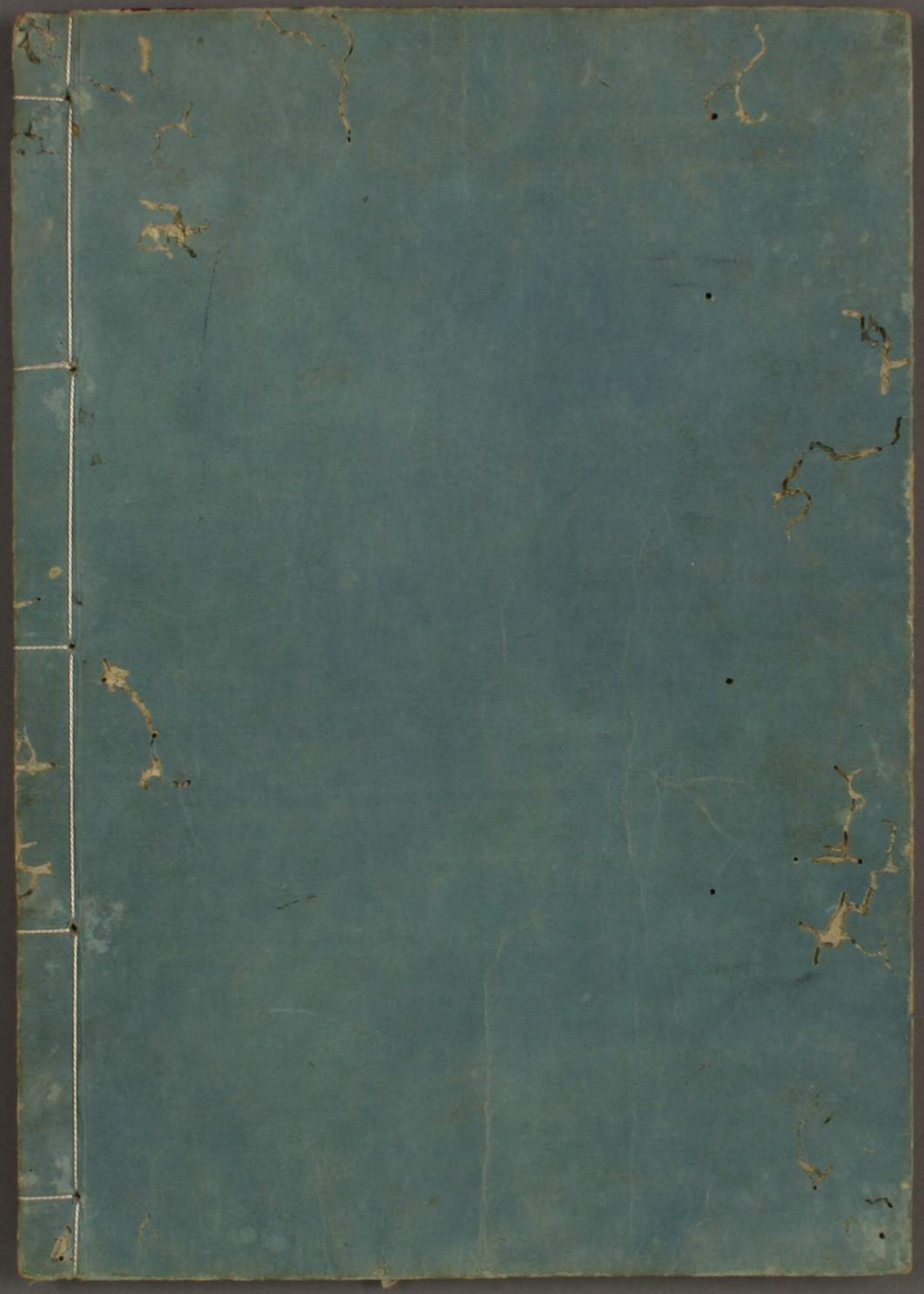
川なれば甚絶景　アハビ石　三ツ石　ゴバン石　ゑるライ岩　燒墓松　名山川辺にあり　鏡石も其中の数石なり　能中　碁盤岩　ゑるライ岩　ゑ石の上に平にして石面削ぎ如　甚絶景の景あり

五十鈴川の川上に桂ヒ石と号し物あり　此宇治の人々中明海の汐なり　是を

駅して荒木田氏の長岩　俗称　弱ゑ　ゑ墨

二寸計大ふさまくる
いるなり　ゑ石なり
長サ八分ばかり



四寸計

伊勢參宮名所圖會卷之四終